

カレッジの歴史(2)

ゴールドスミス・カレッジ

池田良三

目次

まえがき	八一
一、ゴールドスミス組合の教育事業	八一
二、ゴールドスミス同業組合	八二
1 信徒団の発生	八二
組合員の制服 役員 集会場	八二
2 慈善事業	八五
3 職業ギルドの成長	八五
勅許状 勅許状下付申請	八五
職業倫理 産業上の変化	八五
4 ゴールドスミス同業組合	九〇
ロンドン市長となつたゴールドスミス	九〇
三、ゴールドスミス・カレッジ	九二
1 工芸とレクレーション研究所	九二
ウェリントン・カレッジ	九二
2 ロンドン大学	九五
自然科学研究時代 ファラデー研究所の開設 ロンドン大学への移管	九五
(1) ユニヴァージティ・オブ・ロンドン	九五
(2) キングズ・カレッジ	九五
(3) 総合大学「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」の創立	九五
3 ゴールドスミス・カレッジの創立	一〇〇
(1) ゴールドスミス・カレッジ	一〇〇
(2) 教員養成学部	一〇〇
(3) カレッジの改造案	一〇〇
労働者教育協会 大学開放講座 ラスキンのカレッジ	一〇〇
(4) 第一次世界大戦 大戦後の充実	一〇〇
(5) 第二次大戦 大学の疎開 ロンドン復帰	一〇〇
(6) 学部の充実	一〇〇
注	一一一
あとがき	一一三

まえがき

イギリスの教育制度の中で、カレッジの占める地位は非常に大きい。このカレッジの中には古い創立のものが多く、中には新しいものもある。今回は最も新しいものの代表として、ロンドン大学に属するゴールドスミス・カレッジについて述べることにする。

ゴールドスミスカレッジは教員養成大学としてその歴史は古く、最大のものとなっている。このカレッジにイギリスでも有力な同業組合名を冠していることは、われらにとっては異様に考えられる。ゴールドスミス同業組合（金細工業を営み、一八世紀までは金融業も兼ねていた）は、一九世紀自然科学の研究が盛大となる時代、その研究促進の目的で、一八九一年「工芸とレクリエーション研究所」を創立した。これはロンドンの南部地域の住民に研究施設を提供し、同時にレクリエーションの場を提供する、成人教育施設であった。

一九〇二年教育法は、教育行政組織の整備と、中等教育の充実を目標としていた。中等学校の教員不足は目に見えている。ゴールドスミス同業組合は一九〇五年、この研究所に属する土地、建物の一切を、主として教員養成機関（レクリエーションの場合は従として）として、ロンドン大学充実のための寄付することとした。

現在ゴールドスミス・カレッジは、教員養成学部、美術工芸学部、夜間学部の三学部を擁している。夜間学部は地区住民に研究とレクリエーション

ョンの場を提供し、その事業内容は極めて多彩である。ラテン語やフランス語ドイツ語等の語学教室、器楽声楽等の音楽教室、体育、水泳、ダンス等の教室、大ホールでの音楽会、映写会等、成人教育機関として開放されている。この外労働者のために長期の「大学開放講座」も併設されている。

前号「イギリスの教育」(9)では、イギリスで最も古いシュローズベリー（サロップレア）の、聖メアリ・カレッジ及び聖チャド・カレッジについて述べた。その節この両カレッジに付設されている、「信徒団」の「礼拝所」について述べた。（フラタニティ Fraternity は、兄弟の間柄、同業者仲間、宗教的、慈善的目的をもった信徒団体と訳してある〔研究社、新英和大辞典〕。本論文では第二節信徒団の発生で述べているように、同業組合が成長する初期の段階で、職業上のことよりも宗教上の目的をもつ段階をさしている）。

服地商組合に属する「信徒団」は、聖メアリ・カレッジ内に小さい「礼拝所」をもっていた。彼等はキリスト教徒としてその信仰を深め、同時にその結束を強め、さらに物故組合員の霊を慰さるために、この礼拝所専属の牧師を一名雇っていた（これは教会の牧師以外である）。

この牧師の報酬と、貧乏な人々を救済する資金とするために、組合の資金で購入した財産（土地家屋等）をこのカレッジに寄付していた。寄付年代は不明であるが、後にエドワード四世（一四六一—一八三在位）によってカレッジ財産として追認されている（従って宗教改革時代財産没収の対象となり一五四八年全部没収された）。この没収財産台帳によると、この礼拝所に属する財産収入は、年間一五ポンド一五シリングの多額に達していた。その支出の条件は、

(イ) 物故組合員のため礼拝所で朝夕祈る牧師を一名雇う。報酬は年四ポンド。

(ロ) 貧乏な老人一五名を救済する。世話役の一名に食費一週につき二ペンス、燃料として薪を年二荷、その他の一四名には一週につき一ペンス、薪一荷ずつ支給する。以上で食費合計五三シリング四ペンス。薪は一荷八ペンス合計一〇シリング八ペンスとなる。

(ハ) 地代集金人の報酬は年一〇シリング二ペンス。残金八ポンド一〇ペンスは礼拝所のろうそく代、ぶどう酒代、死者があれば臨時費として葬式の費用を支出するなど、予備費。

カレッジや礼拝所に勤めている牧師は、日曜日以外の月曜日から土曜日にかけて、近くの子どもたちを集めて無料で教えていた。無料で教えることを義務づけている礼拝堂（礼拝所の独立したもの）もあった（Free School）は月謝無料の学校の意味で、この名称をつけた最も古い学校は、オックスフォード辞典によると、一四八八年、サー、エドマンド・シャーがその遺産で郷里ストックポート（マンチェスターの南東一五キロ、現在人口一四万の小都市）に創立した、グラマースクールである（エドマンド・シャーはロンドンのゴールドスミス同業組合員の一人で、ロンドン市長を一四八二―三年の一期勤めたことのある人物である、後出）。この無料で教える牧師への謝礼を表わす言葉に Cock-penny, Victor-penny, Potation-penny 等の語がある。オックスフォード辞典によると Cock-penny は、「イギリス北部の学校で昔聖灰水曜日のさんげの日（二月上旬）教師へ差し出した習慣としての謝礼金」とある。このような礼拝堂とこのような教師が全国に多数存在していたことを示している。

ギルドという言葉でわれらは職業ギルドの意味しか考えない。しかし人間の最も早い結びつきは前述のように「信徒団」であったという。それは難病の流行に対する弱い人間の一つの対策であった。そのような時代をへて次第に商業が発達し、職業ギルドの活躍の時代を迎える。同時に職業倫理が生れる。財力を積むに従い、その余力を社会に還元しようとし、福祉事業即慈善教育面で多角的な事業を経営するようになる。そして如何なる事業を経営する場合でも彼等の宗教的信念は弱まることはない。イギリスの学校総数は約三万三千校、このうち四三％は教派別の私立学校である。徹底した宗教教育を実施するために私立学校を経営している。宗教教育の一つの大きな目的は、国民の大同団結であることは前著に述べた通りである（イギリスの学校教育、第二章、第一〇節、道徳宗教教育を参照されたい）。

今回はカレッジの歴史として、最も新しいゴールドスミスカレッジの創立と経営の概要を述べたが、この一部は「イギリスの教育」(5)（未刊）で発表する予定であった、同業組合の歴史についての記述も含まれている。諸賢各位のご批評の言葉を承ることができれば幸に存じます。

一、ゴールドスミス組合の教育事業

ゴールドスミス・カレッジはロンドン大学に属し、次の三学部を擁している。

- | | |
|----------|----------|
| 1、教員養成学部 | 学生数約六〇〇名 |
| 2、美術工芸学部 | 学生数約四〇〇名 |

以上の二学部学生は学位を目標に学問をしている。

3、成人教育の夜間学部

この学部はロンドン市庁（大ロンドン市のうち、最も古くから自治権をもつロンドン・シティを除いた残りのロンドン市庁で、教育、道路、公園、消防隊の維持管理に当たっている役所）の教育当局が教育費を負担し、管理運営に当たっている。一九五〇年には、学級数一八〇、名簿には三、〇〇〇名以上の氏名が登載されていた。最も多いのは古典語（ラテン語ギリシャ語）と現代外国語（フランス語ドイツ語等）の言語教室の五〇、次に音楽教室の三七である。また映画鑑賞会員は土曜日夜いつも二〇〇名以上出席していた。

大学の学生以外の労働者のための大学公開（長期）講座は、三〇講座（一九五〇年）開かれていた。学生数は全員で約四、〇〇〇名となっていた。遠方の学生のために男子寮及び女子寮合計十二寮が用意され、学生は非常な恩恵を受けていた。^{〔注1〕}

現在このように活動しているこのカレッジの前身は、ゴールドスミス同業組合がチームズ河南岸地域住民の福祉のため、一八九一年設立した「工芸とレクレーション研究所」である。組合は、創立の新しいロンドン大学が早く充実するよう、また成人教育面でも役立ててもらうよう希望をそえて、一九〇五年この施設の土地建物の一ごと、年々の運営費の寄付を申出た。こうしてゴールドスミス・カレッジとしてロンドン大学内にその地位を占めることとなった。その運営面では不自由な面があるが、ここで学ぶ学生にとっては極めて自由な大学である。昼間の学部で学位や免許を目ざして学ぶ学生、或は夜間部で学び、その能力によって奨学金を受けて昼間部に移ることもできる。

昼間の学生が一日の課業を終り、それぞれの寮や自宅に帰っていく。

暫くすると、今度は夜間部の学生が都内のあちらこちらから集まり、校門に老若男女のざわめきがはげしくなってくる。それらの学生も、それぞれの教室に吸いこまれる。このような教育の場を社会に提供している同業組合、特にゴールドスミス同業組合の活動について、次に「工芸とレクレーション研究所」の創立と運営、さらにゴールドスミス・カレッジとなつて以後の発展について、項を改めて述べることにする。

二、ゴールドスミス同業組合

1 信徒団の発生

シティの同業組合として知られている、ロンドンの、組合の制服をつけたギルドの歴史は非常に古い。その起源はアルフレッド王（八七一—九〇一在位）や、エドワード・ザ・コンフェサー王（九〇一—九二五在位）等の年代記の中にも、同業組合についての記述があると、「ロンドンシティのギルドの著者アーネスト・ブローレーは述べている。^{〔注2〕}

「ギルド

元来は協同体を意味する一般的な名詞で、ノルマン人の征服一〇六六年—以前のギルドは宗教的性格のものであった。一二世紀以後、商人や職人が職業別にギルドを結成するようになった。ギルドは職業的活動の外、宗教、教育のためにも活動した。各ギルドは守護神となる聖者をいただき、教会に専用の礼拝堂をもち、慈善や教育に多額の金を寄付した。ギルドが地方政治に影響力をもつ時期があった。しかしイギリスではギルドの結成に勅許状を要したので、ドイツやスイスとちがって政治を専断するようなことはなかった。ロンドンのシティの

同業組合は一三世紀から現在まで、ロンドン市長の選挙母胎となつて
いる。^(注3)

ギルドという言葉自体はもともとアングロサクソン語で、支払うという意味の *gildan* に由来している。一世紀から一二世紀にかけて町^{タウン}(勅許状によって王から一定地域を借りうけ、周囲に城壁をめぐらし、市長を選び、立法、司法、行政の全般にわたって自治権をもつ自治都市)小著「イギリスの学校教育」四八―五二頁を参照されたい)がその独自性を主張し、その優位性を発揮するようになる期間に、同じような同業組合が西北ヨーロッパにひろがった。^(注4) イギリスでも同様であった。

プーレーによれば、ギルドという言葉が使用された最初のもものは *frithgild* (フリスとは狭い入江、又は河口のことをいう) というサクソン語である。これは相互防衛用ともいべき団体のことである。家族が一単位となる集団で、その目的は彼等の住居のある入江社会の秩序を乱す者や、外海からの侵入者を共同で捕え、その社会の安全をはかる強制的な団体であった。

同業組合という場合、すぐ職業を推進する組合という意味が強く表面に出てくるが、最初はそうでなかった。ロンドンの同業者たちは早い頃から特定の地域に集まるようになった。ソーパーズ・レーン(小さい道)には食料品商たちが住み、洋服商、服地商たちもそれぞれの通りをつくった。これらの人々は隣人として一定の会合をもち、情報の交換をするようになった。これは自然の勢であった。これらの最初に組織された団体の目的は職業的、商業的なものではなく、宗教的色彩の強いもので、これは *Fraternity* とよばれるもので、今は信徒団と訳しておく。彼等は最初の頃は集会の場所をもっていなかったもので、近くの教会や修道院又は

救護院等をその集会場に選んだ。そこで彼等の団体が結成されると、集会所である教会や修道院が尊敬する聖人を彼等の団体の守護神とし、彼等の共同資金の中から祭壇のろうそく代やぶどう酒代、死者に奉仕する牧師の費用その他を支出していた。

このような団体を結成する第一の目的は、組合員一人一人の魂の救済である。安心して生活し、安心して死につくことができる、魂の救済である。もし組合員の誰かが死亡すると、組合員全員が教会に召集され、荘厳なミサが行なわれ、丁重な葬儀が行なわれる。その費用は四半期毎に積立てられる。この資金で組合は、金糸銀糸で織った素晴らしい葬式用の棺衣(葬式に使用する棺のおおい布)を新調する。現存する棺衣は美術品としても高く評価されている。その上教会に対してはろうそく代と同様、奉仕する牧師に対しても金銭で支払う習慣が出来上った。これによって教会自体も経済的に豊かになった(イギリスの教育^(注5) シュローズベリーの聖メアリ及び聖チャドの両カレッジを参照のこと)。同じく同業組合も教会の保護を受け、教会と関係のない非合法の団体であれば受けたかも知れない危険を(教会の保護によって)、避けることができるのである。

組合員の制服

中世時代上流階級に属する領主や政府の高官は、その地位にふさわしい服装を整え、その従者たちにも特定の制服を着用させていた。武装するときも服装は統一されていた。教会でも牧師たちは制服をつけ、修道僧はずきんつきの外衣(ガウン)をつけていた。

同業組合の制服が現われたのは一四世紀の中頃のことである。ガウン

は明るい色に染められ、頭には円いものをかぶり、肩から背後にたれをかけ（温をとるため）、肩かけで首を巻き、その端を長く垂らしていた。色は赤と青、赤と紫、暗紅色を用い、組合員が喜んで組合長や事務局長の制服を着たがるような色としていた。組合内の階級差はガウンやずきんをつけているかどうかで区別し、他の組合との区別は制服のちがひによった。

組合員は常に制服を着用し、儀式の場合は特に厳重であった。このことは彼等の信仰上でも同様であった。同業組合ははじめ聖人の名を冠する信徒団として発足したことを前に述べたが、この名称は後に職業ギルドに移行して後もそのままの名称であった。例えば服地商組合は「聖処女マリアの名称をもつロンドン・シティの服地を扱う同業組合又は信徒団の兄弟たち」、ゴールドスミス組合は「金属加工業者の守護神聖ダンスタン（九二五—九八八、カンタベリー大僧正）の名をもつゴールドスミス」と称し、制服のもとで結束を固くしていた。

役員

信徒団の頭はアルダーマンとよばれ、この頭は四名の補佐役に助けられるが、これは後世 Warden と呼んでいる。事務局長とよんでよい。組合員にミサに出席せよと通知するのは事務局長の任務である。儀式が終るとサクソンの習慣で宴会となる。この宴会は会員一人一人を仲間として結びつけ、親しさを増すためのもので、同業組合の機能として欠くことの出来ない行事である。

この宴会の起源は素朴なもので、会員各自が持ち寄った食料で実施されていた。時代がさがり組合資金が多くなるにつれ、いわゆるディナー

（正さん）となった。このディナーは組合の聖人の日、役員改選の日に催される。この日組合員は制服に威儀を正し、教会まで行列を組み、ミサに列席し、その後「組合集会所」のディナーに列席する。^{（注7）}

集 会 場

組合の会合や事務処理の場所は、はじめ組合員の私宅が教会の一室を借りて使用していた。組合員が増し、事業資金が多くなつて後は、組合独特の集会場を建てはじめた。すなわち「組合集会所 Guild-hall」である。所がロンドンの大火（一六六六年）で殆んど燃失した。その後貴族の邸宅を買収したり、裕福な会員に寄付されたりして、益々素晴らしい集会場ができた。

服地商組合は一四世紀スィン街に集会場をもっていたが、ヘンリー八世（一五〇九—一四七在位）時代エセックス伯の大邸宅を買収した。エセックス伯とはトーマス・クロムエル（一四八五—一五四〇）のことで、彼はヘンリー八世の宗教改革を全面的に支持しなかったので、遂に処刑され、財産は没収された。

歴史的な集会場としては絹織物商のそれをあげることができる。この同業組合は既に一九〇年ロンドン・シティに根拠地をかまえた。彼等は十字軍騎士修道会が経営する聖トーマス救護院と提携し、この救護院とその修道院の後援者となった。この組合の集会場のある敷地は、もとトーマス・ベケット（一一一八—一七〇、カンタベリー大僧正、ヘンリー二世の教会政策に反対し殺された）の父の邸宅であった。救護院はベケットの妹とその夫が、兄大僧正の殉教者となった記念に創立したものであった。

宗教改革に当っては、聖トーマス修道院の修道僧の手から、ヘンリー八世の役人に没取された。組合は特別の關係で、救護院と教会及び敷地全部を王から買いとった。彼等はここに素晴らしいホールと礼拝堂を建設した（この建物は第二次大戦中の一九四一年五月一日の爆撃で完全に爆破された。^{〔注8〕}）

2 慈善事業

社会や国家の福祉制度が整備されていなかった時代、貧者の救済は信徒団に委ねられていた。さきにシュローズベリーの聖メアリーカレッジに付属する、服地商組合の信徒団寄贈の礼拝所について紹介した（イギリスの教育^{〔9〕}、まえばきに再掲している）。この礼拝所に寄付された財産からの収入年間（一五四〇年代）一五ポンド一五シリング、この中から礼拝所付牧師の年報酬四ポンドを支払い、貧乏な老人一五名の食費燃料代年間の合計三ポンド四シリングを支払っていることを述べておいた。この老人は組合員だけに限ったとは思われない。

この外、病弱者、寡婦、孤児等の救済、貧乏な若者への事業資金の貸与、貧乏な少女の嫁入りの持参金、学校に在学している者への奨学金、大学へ派遣する特別奨学金等、同業組合の慈善事業は極めて幅広いものであった。救済資金は富裕な組合員から寄付され、それらは委託財産として以上の救済資金にあてられ、或は死者の埋葬、命日、故人の魂の救済のためのミサなど、こまごましたことまで組合の事業として実行されていた。ここにその一例としてロンドンのゴールドスミスの一人を紹介する。

ジョージ・ヘリオット（一五六三—一六二四）

彼はエジンバラの「ヘリオット救護院」の創立者である。彼はエジンバラに生れ、父はゴールドスミスであり、スコットランド議会への市代表議員であった。一五九七年ジョージはデンマークのアン女王のゴールドスミス（同時に金融業者でもあり）となり、アン女王の夫スコットランド王ジェームズ一世が、イングランド王となりその宝石商とゴールドスミスともなったので、ロンドンに移り住んだ。救護院は彼の遺贈によって設立されたものである。^{〔注9〕}

3 職業ギルドの成長

信徒団といわれる頃も同じ職業の者が同じ場所に集っていたが、これはどこまでも宗教的活動が主であった。一三世紀から一四世紀にかけて、職業的色彩が強くなってきた。同じ職業に従事する人たちが、一定規格の品物を製作し、販売するための独占権を獲得しようと努力するようになった。

独占権を得るための条件としては、組合内部の問題として厳重な規則の制定である。一つは人事に関する問題で、徒弟の採用資格、職人の待遇と将来の所遇（親方になる条件）、親方の権利義務、その人数等。次に使用する材料の入手方法、製造方法と製品の検査、価格の決定等製品の問題である。

次に一定地域の独占権を獲得するための上納金（領主や都市の市長へ納入する）、旅行や宿泊についての安全保証も獲得すべきである。

さて、外国商人に対してはどのような方法があるのか。イギリスの羊毛を買いつけにきたイタリア商人やハンザ商人が当面の敵である。羊毛貿易のきめ手となったのは、新しいマーチャント・ステープラーズ・カ

ンパニー（ステープル商人組合）の設立である。

これより先、イギリスでは羊毛輸出に保護関税方式を強化し、一三〇三年以降、羊毛一袋当りイギリス商人には四〇シリング、外国商人には五三シリング四ペンスをかけていた。これを新しい方式にかえることとした。

ステープル（特定市場）方式とは、特定の指定市場と指定市場の間に商業活動を限定し、関税徴収を円滑にしようとするものである。マーチャント・ステープルブライズ組合は、一三三七年から五〇年頃設立され、羊毛貿易独占へ具体的に動きはじめた。ステープル（特定市場）には一名の市長と検察官がおかれ、彼等は毎年商人によって選出される。度量衡を統一し、国王の関税官の立合のもとに商品の計量に当った。ステープルに関する負債、契約等の訴訟は「商人法」の規定により、この市長の裁判所で処理された。^{（註10）}これは商業ギルドの新しい方式で、市場独占のための新しい組合の創造である。組合員の結束の方法は従来のもものと少しちがっているが、その精神は少しもちがっていない。

都市の商人組合

都市のギルドは連合して商人組合を結成し、勅許状によって自治都市の市民生活の規則を制定する。市民は市会議員を選び、議会で市民法を制定する。市長法廷では組合の権限を確認させる。ロンドン市民は市長選出権を、一二一五年の勅許状で確実に握っている。^{（註11）}同業組合は市長法廷に訴え出ることができるし、彼等はまたこの市長法廷から彼等の権限を得るのである。以上のように同業組合、或は組合連合たる商人組合が、自治的に活動するための法的根拠となる、勅許状について述べるこ

ととする。

勅許状

勅許状とは「国王又は立法府から発行された公文書」で「人民或は特別の階級又は個人に特典を与え権利を承認」している（オックスフォード辞典、同辞典ではこの意味の最も古い公文書としてイギリス国民に基本的自由を許可した、一二一五年の大憲章をあげている）。

同業組合に発行された勅許状で最も古いものとしては、織布工組合と鞍製造人組合に発行されたもので、ヘンリー一世（一一〇〇—一三五在位）時代のものである。ヘンリー二世（一一五四—一八四在位）時代、パン焼人組合はその生産品に対する税のかわりに、王への返済金として年間六ポンド支払っていたことがわかっている。この返済金はお礼の一種と認められている。この外に一八の不法につくられた同業組合の場合は、正式に王の許可をもらっていないという理由で罰金をとられている。彼等はウィリアム一世の死（一〇八九）、ステイファン王（一一三五—一五四在位）時代以後の苦しい時代に、その事業を有利に拡大した。この中の四つの同業組合のみが職業ギルドで、後世代表的な同業組合に発展している。即金細工商組合、食料品組合（後はグロースーイズという）、肉屋組合と毛織物仕上げ人組合の四組合である。

先に述べた織布工組合が受けた勅許状は一一三〇年（ヘンリー一世時代）発行されているが、これは他の組合をうらやませると同時に不平感を持たせた。こうして次々に勅許状が発行されることとなった。これらの勅許状によって引上げられた同業組合、それらが連合した商人組合（自治都市の主体となる団体）の、立法、司法、行政上の権利、義務

は、次第に領主と教会の水準にまで高められることとなる（それまで領主と教会はロンドンの司法権をもち、ロンドンの人々の職業上の問題についても領主としてこの支配権をもっていた。ロンドン市民が市長を選出する権限が許可されたのは、大憲章が発行された一二一五年であった、と先に述べた通りである）。こうして従来領主と教会が別々に持っていた権限が、次第にその地域を支配する同業組合、及びその連合体である商人組合の手に移っていく。組合の事務をとる組合事務所が「ギルド・ホール」で、現在はタウン・ホール（町役場）となり、大文字で Guild-hall とあれば「ロンドン市庁」であることは、英和辞典にある通りである。織布工組合が王の金庫に支払う二枚のマーク金貨（中世時代欧州大陸で行われた金貨）に対し、ヘンリー二世（一一五四―八九在位）は勅許状を追認したので、彼等は益々その地位を確立することができた。

その後凡そ一世紀間職業ギルドには混乱期が続くが、エドワード二世（一二一七―一二七二在位）、エドワード三世（一二七二―一三五〇在位）時代となると国内産業奨励時代を迎え、勅許状は次々に発行される。一五〇〇年までに二五〇同業組合が法人団体となり、自治権をもつ正式の組合として認められた。^{〔注12〕}

勅許状下付申請

勅許状を受けたしんちゅう器物製造人組合の記録をたどることとする。彼等は一四三二年（ジャンヌ・ダルクが英軍に処刑されたのは一四三一年である）勅許状を発行してもらいたいと願い、五シリングを添えて大法官の書記に願ひでた。その頃内乱が勃発したため書記は一時その

活動をひかえたが、エドワード四世（一四六一―一八三在位）の世になって、議会への提出議案が用意された。その諸費用は一〇シリング八ペンスとなった。八ペンスは飲みものに使ってもよいと委任された代表者は、刃物師組合事務所^{カッターズギルド}の役人に相談に行った。他の代表はパンとぶどう酒に使用してもよいと委任されて、僧正区の役人に面会に行った。しんちゅう器物製造人たちは法人団体となるには金がかかると忠告されていたにちがいない。勅許状を獲得するまでに一〇年かかった。一四六七年には積立てられた八〇ポンドの金が、正式に同業組合となるための必要な全部を購入するために、事務局長の手もとに蓄えられた。一四七一年には七ポンド四シリング、七二年には二ポンド三シリング四ペンスの金が正当な費用として支払われた、七三年には最終的に各家庭から強制割当費用として徴収された金額は四一ポンド一八シリング八ペンスに達した。

勅許状が発行されると、新しい法人団体は次に公認された印章を準備せねばならぬ。印章の銀の印台が一〇シリング五ペンス、彫りに要する代金は六シリング八ペンスであった。次は集会場の建設、それが完成したら集会場の付属品の用意、組合の紋章のいった行列用の組合旗、組合員の葬式に使用する豪華な金糸縫いの棺衣等が用意されねばならぬ。全部の組合は独特の紋章の使用を許されているが、この紋章は従来は高い階級に属する貴族及び直属のゼントリーの所有物であった。^{〔注13〕}

都市の同業組合は連合して商人組合をつくり、王から借りうけた一定地域の都市づくりに専念し、勅許状によって次第に都市の立法権、司法権、行政権の拡大につとめた。都市によってその権利獲得に遅速はあるが、このような都市は増田四郎の「ヨーロッパとは何か」（岩波新書）

によると、西ヨーロッパ地域で、

「だいたいにおいてドナウの支流のタイス川と、バルト海にそいでいるワイクセル川、このワイクセルとを結んで、スカンジナヴィア半島の根元のところまで達する南北にしきられた線、これを一つの線とし、それからアルプス及びピレネー山脈を結ぶ東西の線をいま一つの線として、この南北と東西の二つの線に囲まれて、さらにイギリスをも含めた地域」

のみに発達したという（このことについては既に前著で述べておいた）。

前述のようにして、勤労大衆は同業組合を結成し、経済的地位を高めにつれ、都市の市民としてその地位を高め、同業組合は名実共に貴族と同列の地位にまで上昇することができた。ロンドン市長はロンドンシティにおいては最高の実力者で、王又は女王もロンドン・シティを通過される場合は、市長の許可を得、彼の先導のもとで行動される。市長は同業組合の代表の互選によって決定し、任期は一年で、任期が終ると必ず「勲爵士」を授けられる。（ロンドン市長の席次は大法官より上座にある。従って王の次位である。新市長の就任式は一月九日で、この日各組合の役員は中世時代からの正装で行列に参加している。）

同業組合がその独占権強化に努力していることは前に述べたが、これは近い関係にある組合の合併にもあらわれている。皮製品販売人組合の間にそれが見られる。手袋製造人組合と財布製造人組合は、一四九八年連合したいといって法人団体化を請願した。所が四年後に皮製品販売人組合と合併した。

都市の市民間では新しい人間関係が生れ、育っていった。中世時代の封建的な階級差が全然なくなった。裕福な親方と貧乏な職人の間にも階

級差はなくなった。優秀な徒弟は成長してその親方の娘と結婚する希望がもてる社会となっていた。

職業倫理

同業組合はその事業を発展させるために、組合規則を制定して組合の統制をはかり、都市外の同種の同業組合と、或るときは連合し、或るときは競争しながら、生産事業を充実させ発展させ、新しい資本主義的経済活動の基礎を築いた。これら勤労者の精神的支柱となり、彼等を励ましたものは宗教改革の中心人物、カルヴィン（一五〇九—一六四〇）の宗教思想であつた。（カルヴィンはフランス生れの宗教改革者、ジュネーブにおける神政国家の創立者、プロテスタンティズムを確立した、著者キリスト教制度論4巻）

カルヴィンの思想を説明しようとしたマックス・ウェバー（一八六四—一九二〇、ドイツの経済学者、社会学者）によれば、

「選ばれたキリスト者にあたえられている使命——しかも唯一の使命は、現世において、それぞれの能力に応じ神の誠めを実行することによって神の栄光を増すことである。ところで、神がキリスト者に欲したもうものは彼等の社会的な仕事である。けだし、神は人間生活の社会的構成が彼の誠めに適い、その目的に合致するよう編制されていることを欲したまうからである。カルヴィン派信徒が現世においておこなう社会的な働らきは、「神の栄光を増すため」の働きにほかならぬのである。だから、現世全体の生活のために役立つている職業労働もまた同じ性格をもつことになる」と述べている。

神の誠め、即各自がその能力を最高に發揮できる社会的な仕事、社会に

奉仕できる仕事に熱中せよ、職業労働に精魂を傾けることがそのまま、神の栄光を増すことになる、とカルヴィンは教える。

カルヴィンは北フランスのピカルディの出身である。ピカルディ地方は最も早く毛織物工業がひらけた。イギリスの良質の羊毛が輸入されていた。そこで問屋制が発達した。それだけ下層の織布工たちが圧迫された。この圧迫をはねかえそうとしておこったのが、一三〇二年のクートレーの戦いである。この地方に育ったカルヴィンは、勤労大衆の勤労意欲を一層盛り上げるために、彼の宗教思想を述べ、それを政治に実現しようとしてスイスのジュネーブで努力した。当時西ヨーロッパで勤労大衆は都市の市民、その大部分を占める職人階級、それと農民である。

この中でもカルヴィンの思想を容易にうけ入れたのは、独占と自由を求めて向上しつづける小市民層と自作農民層（ヨーマン）であった。

イギリスにおいても同様であった。農村における農奴の地位にあきたらぬ若者たちは、読み書きができるようになると都市の親方のもとで、徒弟となり、職人となった。彼等は職業によって一市民の地位を獲得し、同業組合を足がかりにして、形式上は貴族と同列に並び得る所まで到達することができた。これらの小市民たちはカルヴィンの宗教思想を容易に受入れ、自らの職業に真剣に取組むと同時に、勤儉貯蓄の上、富を福祉事業（学校や救護施設の設立維持）に提供する、いわゆる禁欲的プロテスタンティズムが彼等の間に根強く根をおろす結果となった。

英語の職業をあらわすことばに Calling がある。オックスフォード辞典によると、同項の 9 に、神の救い或は神の御用への召喚、招き、或は励まし、神に呼ばれているという内心の感じ或はその信念、としその文例としてウィクリフの英訳聖書（一三八二年訳）とティンダルの英訳聖

書（一五三六年訳）から引いてある。ウィクリフ（一二三〇—一八四）は宗教改革の暁の明星といわれ、聖書中心主張を唱え、ローマ教会からの離脱をすすめ、ローマ法王から破門された。ティンダル（一四九二—一五三六）も宗教改革となえ、イギリス人に真のキリスト教を教えるため聖書を訳し、遂に殉教者となった。二人ともイギリスが生んだ宗教改革上の偉人である。彼等がねらったものは、ローマ教会からの離脱であり、イギリス人の自由と独立をかちとり、将来の発展の基礎を築くことであつた。このような背景があつて、カルヴィンの教えが受入れられ、イギリスの勤労者たちの職業倫理が確立されたのである。^(註18)

産業上の変化

同業組合の姿が次第に変化している。例えば刃物業組合はやむなく新しい中心を求めざるを得なくなり、シェフィールド組合（ヨークシアの南部ドン河の工業都市、鋼鉄工業の中心地）と同盟を結んだ。この同盟関係は現在までロンドンの刃物組合の先導のもとに経営されている。この組合は実に立派な集会所をもち、刃物業組合長は常に通商上代表的商会（二人以上の合資で経営される法人ではない）の長となり、毎年ロンドン市長の宴会と競争するほどの招待会を催している。この招待会はシェフィールドの宴会といわれているが、それはハラムシア（ヨークシアの南部シェフィールドの近くにある）の領主が提供する鹿肉のおくりものからおこっている。ハラムシア領主は刃物業組合員たちに、彼の狩猟園に入ることを許し、とった鹿を全部勝手に持ちだしてよいと許可していた。

ゴールドスミス組合は今尚彼等の集会所で金銀製品の検定を行ない、証印をはる権利を保持している。しかし彼等は今も早やこの権利の独占権

はもっていない。ゴールドスミスは今も「見本貨幣検定」、即鑄造された金銀貨の純度の検定の儀式を実施している。彼等はまた最近金や銀の平板にデザインを施し、加工する仕事に精だしている。^(注19)

4 ゴールドスミス同業組合

ゴールドスミス(Goldsmith)は「金に細工をする人、金を宝石や装身具、金属板として加工する人」と訳してあるが、実際はそれらの品を取扱う商人でもある以前に、金融業者、宝石業も兼ねていた。一七世紀には金の貸し借りを業とする銀行業務も含んでいた。この適用は一六四五年頃のこと、彼等は質物をとって金を貸し、そして預かった証として手形を発行していた。期日がきたら元金と利息を受取るのである。一六七七年発行されたロンドン商工人名簿によると、「今すぐ貸し出す金を用意している」ゴールドスミス五八名の氏名が出ているが、そのうち三五名の住所はロンバルト街(現在のロンドンの金融業者街)にある。

銀行業務という言葉が生れたのは一七世紀の終り頃のことのようである。記録に出てくる最初の使用例は、聖メアリ・ウールノース教区教会の記録の中にある。その記録には一七〇〇年二月一七日、銀行家ジョージ・リードの娘の洗礼者名の記載がある。ジョージ二世(一七二七―一六〇在位)が王位につく頃までに、ゴールドスミスは金貸し業務を中止し、銀行業務は独立することとなった。

質屋業も古くからの業務で、これが独立した業務として現われるのは一七世紀の終り頃のことである。この質屋業はいろいろな仕事の兼業とされていた。例えば家具商、皮革製品業、煉瓦商等が兼務していた。一八世紀の中頃までは居酒屋の主人が飲み代のかわりに抵当をとっても違

法となされなかったが、これらは全部一七五一年の法律で禁止された。^(注20)

ロンドン市長となったゴールドスミス

一二世紀から一八世紀の終りまでに、ロンドン在任のゴールドスミスの中から有名人が出ていた。この間にゴールドスミス出身の市長が五五名いる(ロンドン市長の任期は一年)。早い時代で最も著名なのはグレゴリー・ド・ロークスレーで、彼は一二七四年から一二八四年の間に八回も選ばれている。

エドマンド、シャー(？―一四八八死)

彼は一四八二―三年ロンドン市長(十一月九日就任式―前出)をつとめた。彼は一四八七年故郷のストックポート(チェシア)に寄附し、ストックポート及びその周辺の子どものために学校を創立し、そこで教える牧師(教師)をゴールドスミス組合が任命するよう、遺言した(この施設は本来はシャーの霊をなぐさめるための菩提寺たる礼拝堂である。

牧師は一名かせいぜい二名で、三名以上いる規模の大きい所はカレッジといっていた。ここにつとめる牧師が日曜日を除き、月曜日から土曜日まで無料で教えた。彼がわざわざ「無料で」教えよと遺言したので、「無月謝学校」という語が初出の文例として引用してあるオックスフォード辞典について紹介しておいた―まえがきの中で)。ここで教える牧師の報酬はこの施設に付属する財産収入から支払っている。この財産収入は、一八七七年合計二七八ポンドであった。^(注21)

同業組合の教育事業

同業組合立学校の最も早いのは絹織物商組合のマーサーズ・スクールである。イートン校の創立者ヘンリー六世（一四二一—六一、七〇—七一在位）は一四四一年、絹織物商組合に法人団体たることを許可する勅許状の中で、ロンドン市内にグラマー・スクールを創立することを一つの条件とした。この組合は一五一〇年本寺長コレットが創立した、セント・ポールズ・スクールの経営も引受けている。

このような同業組合立学校がイギリスに何校あったであろうか。イギリスの公立学校制度が発する直前、綿密な学校調査が実施されているが、その直後編さんされたストーントンの著書（一八七七年発行）^{〔註22〕}によると、学校財産をもつ法人団体立グラマー・スクール七九五校について報告している。この中に組合立学校と組合員立学校二三校をあげている。組合別にすると次の通りである。

- 1、ゴールドスミス組合 四校
- 2、絹織物商組合 三校
- 3、醸造家組合 三校
- 4、食料品商組合 二校
- 5、毛織物商組合 二校
- 6、小間物商組合 二校
- 7、その他の組合立 七校
- 合 計 二三校

今組合員が創立した学校で、その経営をその出身組合に委任している学校の二、三について書いてみる。

1、オウンドル・スクール（ノーザンプトン）

一五六六年、食料品組合長、ロンドン市長、サー・ウィリアム・ラクストンが創立、学校の経営は食料品組合の事務局長に委任されていた。^{〔註23〕}

2、マーチャント・テーラーズ・スクール

一五六一年、同業組合がロンドン市内に創立した。^{〔註24〕}

3、トンブリッジ・スクール（ケント州）

一五五三年、皮革商組合長、ロンドン市長であったサー・アンドレ・ジャッドが創立、同業組合が経営している。^{〔註25〕}

4、アルデナム・スクール（ハーフオード州）

一五五七年、ロンドン市民、醸造組合員のリチャード・ブラッツが創立し、同組合が経営している。^{〔註26〕}

5、グレンアムズ・スクール（ノーフォーク）

一五五四年、魚商人組合の一員、サー・ジョン・グレンシアムが創立し、同組合が経営している（悪貨は良貨を駆逐するといったあのグレンシアムである）。^{〔註27〕}

高等教育

高等教育についてはロンドン市の同業組合の努力によって、一八八〇年技術教育と研究の推進を目的とする、ロンドン市と同業組合立専門学校が創立された。

また同業組合から専門学校に多数の資金が投入された。学校の運営にはロンドン市と学校に関係ある組合の代表が参加した。この代表的なものの一つが、ゴールドスミス同業組合立の「工芸とレクレーション研究所」である。

三、ゴールドスミス・カレッジ

1 工芸とレクリエーション研究所

ゴールドスミス同業組合は一八九一年「工芸とレクリエーション研究所」を創立する目的で、組合の共同資金二〇万ポンドを投じ、売りに出されていたニュー・クロス街にある七エーカー（約八六〇〇坪）の土地と建物を購入した。この建物はもともと王立海軍学校のあとで、凡そ五〇年前の一八四三年、海軍士官や商船士官の子弟のために創立された、寮制の学校であった。創立当時建築費は三万五千ポンドかかっていた。建築はジョン・シャアの設計で、装飾は少いが威厳があり、正面の均衡もよくとれた、レン（一六三二—一七二六、イギリスの有名な建築家、セント・ポールズ寺院等多くの建築を残している）時代の建築を一九世紀に再現したものだと呼ばれていた。一〇年後の一八五三年、シャアは彼が手がけたウェリントン・カレッジ（後出）の建築にならい、礼拝堂を設計し、建設した。

この王立海軍学校の目的は海軍の士官室（中尉以上の者の食堂兼集会室）勤務以上の士官や、それに相当する商船船員の子どものために、健全で割安の教育を施すことであつた。ここにはいつも二〇〇名から三〇〇名の生徒が寮生として在学し、大学や陸海軍の諸学校、或は東インド会社社員として受験する、準備教育を施していた。ロンドンの南部地方に煉瓦づくりやモルタルづくりの建築物が増加するにつれ、この王立海軍学校はもっと静かな田舎に敷地を求めることとなった。この移転計画が一八九〇年明らかになり、この敷地と建物はゴールドスミスの計画に

びつたりであつた。（王立海軍学校はロンドン郊外のモッティンガムに移され、後にエルザム・カレッジと改称され、入学者は海軍士官の子どもに限定されないこととなった^{〔注1〕}）。

ウェリントン・カレッジ

ウェリントン公が一八五二年九月死去された。彼はイートン校をへて軍人となった。最後にあのナポレオンの大軍をウォターローの戦いで敗るという、戦功をたてた。人々は公の偉業を記念するため記念事業が計画されたら、素晴らしいほどの金が集まるだろうと信じていた。公の一族はどの町にも公の銅像が立つだろうと予想していた。イギリスが生んだ国民的英雄をどのようにして記念したらよいのか。総理大臣自ら乗りだして、国民の輿論を聞くために討論会を開催した。その結果は、貧乏で学校へ行けない子、戦死した軍人の子で孤児となった者等のため、月謝無料の学校を創立することとなった（その当時はカレッジ建設時代であつたことは前著に述べている^{〔注2〕}）。女王も皇太子も賛成された。賛成の手紙が一〇万通も到着した。第一回の募金で一〇万五千ポンド集つた。このカレッジ（中等程度のグラマー・スクール）は一八五九年開校された^{〔注3〕}。

一八七七年、ストーントンの記録によると、この学校は古典課程（大学へ進む）と現代課程（陸海軍人、役人希望者）を併設していた。寄付財産からの取入は年一、五〇〇ポンドに達し、これで六二名の奨学生を勉強させていた。自費生は二五〇名で、全員寮に生活し、学費は軍人の子弟は年額八〇ポンド、その他の子どもからは一一〇ポンド徴収していた。この学校から大学におくる特別奨学生は一八名、奨学金合計七四六

ポンド、一名平均四二ポンドであつた。^(註4)この学校は現在(一九六七年)生徒数六八一名(全寮制の学校としては第4位の数)で、一流のパブリック・スクールである。^(註5)

自然科学研究時代

一八世紀から一九世紀にかけて自然科学の研究がすすみ、その研究機関として、或は伝達機関として、各種の研究所が設立されている。王立研究所は一七九九年創立された。創立者ランフォード伯(一七五三—一八一四)はアメリカに生れ、後にロンドンに移住した。彼は科学者となり、物理学と化学の研究をすすめ、その知識を広く一般の希望者にもわけ与えるため、講演会等も開催できる施設としての研究所を設立した。

その第一代教授としてトーマス・ガーンネットを招いた。彼はヨークンア出身の医師で「グラスゴウの科学と技術のローヤル・カレッジ(研究所と教授をかねた研究所)」の初代の教授をつとめ、このカレッジで物理と化学について、グラスゴウの婦人と紳士に昼夜の別なく講義を続けていた。^(註6)

第二代のハンフリー・デーヴィ(一七七八—一八二九)は、一八〇二—一二年の間教授であつた。後ででてくるマイケル・ファラデー(一七九一—一八六七)が、デーヴィ教授の講演を聞いたのは一八二二年二月一九日、彼が二一才の時であつたという。^(註7)

この頃新しい科学研究団体が続々誕生している。主なものを列挙してみる。

地質学協会 一八〇七年
王立天文学協会 一八二〇年

動物学協会 一八二六年

王立地理学協会 一八三〇年

王立植物学協会 一八三九年

化学協会 一八四一年

これらの協会又は研究所の任務は、一つは研究活動で、もう一つは教育活動である。青少年を対象とするもの、成人を対象とするものがあつた。その一端を物語る記念品はファラデーの「ろうそくの化学」(一八六二年発行)である。この本の著者とその活動によって、当時の科学研究の実験の一部を知ることができる。

マイケル・ファラデー

彼はロンドンの場末の鍛冶屋の次男に生れた。生活保護を受けるほど貧乏な家庭だったので、彼は早くから家業を手伝わされた。一四歳の頃製本屋の小僧として無給で働かされた。彼は屋根裏の部屋で次第に化学に興味をもち、青年になって王立研究所のデーヴィの公開講演をきき、化学の研究を生涯の仕事とすることを誓った。彼がデーヴィの実験助手となつたのは、一八一三年、彼が二二歳のときであつた。彼は自然の秘密をかぎつける独特の感覚の持主であつたといわれる。彼は自然とじかに対決しながら真の知識を身につけた。彼の研究成果は電気分解の法則の発見、ベンゼンの発見、塩素の液化法の発見等、質量ともに驚くべきものであつた。

彼は一八二五年教授となり、一八六一年職を辞した。一八六〇年のクリスマスに彼は王立研究所で青少年向け六回続きの講演会を開いた。その速記録が「ろうそくの化学」である。目次を見ると、第一講

一本のろうそく——その炎、原料、構造、運動、明るさ、第二講 一本のろうそく——その炎の明るさ、燃焼に必要な空気、水の生成、第三講 生成物——燃焼からの水、水の性質、化合物、水素、以下略。彼は一本のろうそくを燃やしながら、燃焼に伴う物理化学的变化、化合物について、具体的に話しかけながら、少年たちに真の意味の科学する心を植えつける、素晴らしい講義である（私の机上に岩波文庫本 蠟燭の科学 昭和九年十月二十日第二刷 がある。私は若い頃この一冊を読み、論理的な実験のすすめ方、ヨーロッパ的思考の様式を見せつけられて、大いに感じさせられた記憶がある）。

研究所の開設

工芸研究所法が一八八九年通過した。その後の一〇年間にロンドンの大同業組合は「ロンドン・シティ教区慈善法」（一八八三年制定）による資金の援助のもとに、新しい諸工芸を推進することに懸命であった。

ゴールドスミス同業組合は「ロンドン・シティ教区慈善法」の資金援助を受けないで、自己資金のみで、「工芸とレクレーション研究所」を設立し、一八九一年皇太子臨席のもとに開所した。四〇年後に設置された成人教育局の記録の中に、ゴールドスミス同業組合の書記の所見が記されている。それによると「この研究所は、その性格は全く非学派的、非教派的で、その目的は生産や労働に従事する工業上の技術や知識、健康や一般的福祉の推進をはかることであつた……新しいことを教えることと、趣味によって気晴し（レクレーション）をすることに、同等の価値がおかれていた」^{〔注8〕}。

組合は買収した施設の改善にとりかかった。古い教室は体育館に拡張

され、水泳用プールがつくられた。一辺が一〇〇フィートもある、四角形の大ホールには、一、〇〇〇脚の椅子が備えられていた。アボット氏とスミス氏寄贈のバイプ・オルガンは開設の翌年備えられた。

この研究所の活動は、教育的、社交的、レクレーション三方面的の活動の場を用意することであつた。この中の一つ、美術工芸学部はすぐ評判が高くなった。その教科内容は、写生科、デザイン科、模型製作科、木彫科、美術刺しゅう科、金属加工科、エナメル科の七科となつていた。

教師としてはマリオネット校長の外、それぞれ専門の教師がいた、フロスト博士のもとではいろいろの音楽教室が栄えた。ライナム氏のもとでは工学と建築学について、夜間高字部の講義があつた。ラブワース氏のもとでは化学と物理学、ターナー氏のもとでは、大学の科学学士を目標とする学生水準の、数学と物理学の講義があつた。

この外商業科教室、公務員受験科教室、婦人のための諸教室、体育（水泳を含む）教室、その外レクレーション活動のための教室が用意されていた。各教室に出入する学生は、昼間の者、夜間の者、これこそ多種多様であつた。

大衆のための音楽会は大ホールで定期的に演奏され、多くのクラブや各種の協会が結成されていた。最初の一年間、この研究所の会員数は四、〇〇〇名以上が記録されている。四分の一以上は婦人であつた。一九〇〇年（明治三十三年）になると、会員数は七、〇〇〇名となり、その指導に当る時間給講師は一二〇名の多数に達して^{〔注9〕}いた。

ロンドン大学への移管

研究所は以上述べたように順調に運営され、効果をあげていたが、組

台側の負担は年一万五千ポンドに達していた。組合は研究所の維持とその将来を考え、一九〇四年この研究所の全施設をロンドン大学に寄付し、移管する交渉をはじめることとした。これは一九〇二年教育法によりロンドン地域の初等中等学校を管轄する教育当局が設置されるに当り、ゴールドスミス組合経営の「工芸とレクレーション研究所」の施設全部を公の機関に委ねたがよいとの判断によるものである。しかし一部では成人教育機関としてロンドン市庁（ロンドン・シティを除いた大ロンドンを管轄している）の教育当局に寄付するのが当然とする者もいた。

ロンドン大学への移管の条件は、施設の財産は教育目的のみに使用することという一項のみであった。しかしその中でも最も重大な申出は、一九〇二年教育法（教育行政当局の強化と公立中等教育の充実を目標としている）施行後は、良い資質をもつ教師が要求されるので、寄付した施設はロンドンの各地から派遣される教師の再教育に奉仕するカレッジとすることという条件であった。大学の評議員会は組合からの寛大で素晴らしい贈りものを快く受入れることを決定した。

しかし一方ではこのゴールドスミスの施設の恩恵を受けていた人々に大きな失望を与えた。一九〇四年三月、ケンティッシュ・マークユリー紙は「青天の霹靂……ロンドンの新教育法の最初の結果の一つ」という見出しで、「多くの人々はもとゴールドスミス組合がロンドン市庁教育当局に譲渡し、その条件としてこの地域の利益をみたまう考えておいてくれたらなあと思っていた。……もし大学がこの施設を大学自体の目的のみに使用するならば、ロンドンでも一流の美術学校と、さらに一、〇〇〇名の学生をかかえている工業教室ともおさらばであろう」と述べて

いる（ケント、イングランド南東部の州、チームズ河南方の田園地方、人口一六〇万）。

所が同紙は四月になると論説の中でもモンモランシー氏は、一七五万人もかかえる南ロンドン地域の大きな中学校によって育てられる、広大なカレッジとなる場合のことを熱心に論じ、彼は大図書館への成長を心に描きながら、次のように論文を結んだ。「南部ロンドンに出来る新しいカレッジは、ゴッワー・ストリートにあるユニバーシティ・カレッジ（ロンドン大学の最も早く出来たカレッジ）が北部ロンドンの中心となつて果していることを、南部ロンドン地区のために果すであろう。……南部ロンドン地区は活動の中心を得たのである」。

大学自体は新しい疑問にぶつかっていた。校外学生も含む研究機関（大学の学生以外に希望者を昼間又は夜間入学させる、大学を解放する公開講座を示す）が、ロンドン高等教育という幅広い計画の中で、如何に運営されるべきであろうか。全く新しい任務である。

2 ロンドン大学

(1) ユニヴァシティ・オブ・ロンドン

世界中でも最も裕福で人口も多いロンドンに、一八二八年まで大学がなかったということは、実に不思議なことであった。しかし大学設立の動きがなかったのではない。

グレンシャムのカレッジ

金融業者、慈善家、王立取引所の創設者、サー・トーマス・グレンシャム（一五一九—七九）は、ロンドンの商人の子として生れ、カイウス・カレッジ（ケンブリッジ）卒業後、絹織物商組合員となり、またヘンリ

一八世（一五〇九—一四七）の代理人として活躍し、財産を築いた。彼はロンドンに帰って後、株式取引所を創設した。

彼は一五七九年没しているが、彼はその遺言で彼の広大な邸宅と取引所からの収入全部を、ロンドン市と絹織物商組合に寄付した。その目的はここで中世の大学にならって、修辭学、音楽、天文学、幾何、神学、医学、法律の教授が行われるよう、七人の教授を提供することであった。所が彼が残した財産には管理人がいなかった。そのため彼の計画は発展しなかつた。^{〔註12〕}講義は一五九七年開始され、一七六八年まで続けられたという。^{〔註13〕}

大学の機能は一八世紀の初めの頃までは、単に教会に牧師をおくり、国家のために事務能力のある紳士をおくればよいと考えられていた。所が一八世紀の終り頃になると、工業の形態が変化し、商業は國際的に拡大された。教育もこの社会的変化を正確にとらえる必要にせまられた。大学の概念は凡そ次のように変化していた。

第一に、大学は世界的知識を提供する所で、限られた古典で精神的糧を提供する場所ではない。

第二に、大学は人種や信条に拘らず、あらゆる階級にその門戸を開放すべきである（従来イギリス国教会派の信者のみオックスフォードやケンブリッジに入学することが許されていた）。

第三に、大学は単に教会や立法府で働く人々のみの養成所ではなく、その他の方面で働く人々も育てるべきである。

最後に、今後の大学はその学費を極めて低額におさえ、オックスフォードやケンブリッジのように法外に高額であってはならない。

ナポレオン戦争（ウオーターローの戦いは一八一五年）が終って以後

は、技術教育やその他の面でも、より高い教育の必要が呼ばれていた。

機械工業研究所

先づ機械工業界で活動できる熟練した職人の養成が急務である。これは幼年工の養成と同時に、現に働いている人々の成人教育として今すぐ必要なことである。この要求に応じて一八一七年開かれたのが、ティモジ・クラックストンの「機械工業研究所」であった。しかしその管理は独裁的で、教育課程は極めて狭く、その方法は学究的にすぎた。一八二〇年には自然消滅した。

ロンドン機械工業研究所

ジョージ・バーベック（一七七六—一八四一）は一八三三年、ロンドン機械工業研究所を創立し、成功させた。彼はヨークシアに生れ、エジンバラで医学の勉強を終って後、一七九九年グラスゴウのアンダーソン協会の自然科学担当教授に任命された。ここでは機械工が機械について学習し、その技術をみがいていた。経営は自営方式をとり、管理は全く民主的で、講師の決定は一般会員の推せんによった。バーベックは後にロンドンに移り、一八二三年協力者と共にこの「ロンドン機械工業研究所」を設立し、彼が初代の所長となり、四一年死ぬまでその地位にいた。

この協会の目的は職人に化学と機械の哲学、創造と科学、富の蓄積ということに親しみをもたせることであつた。この研究所の試みは大成功で、一八二四年には一三〇〇名の研究生がこの研究所の門をくぐった。

（この研究所は後にバーベック・カレッジに発展し、さらに一九二〇年にはロンドン大学を構成するカレッジに移管された。^{〔註14〕}）

このような研究所は各地に次々に設立され、一八五〇年までに六一〇

ケ所となり、登録された研究生は一〇二、〇五〇名にも達した。^(注15)
新大学の要求

一八二五年頃になると、大学は富裕な少数者の独占にまかせていてよいのか、今や知識を広く多数の者に知らせ、有用な人物を養成すべき時に到達しているのではないか、このような議論が盛んになった。この疑問は特に二つのグループで激しく論ぜられた。一つは教養ある非国教会派に属する人々で、E・アーヴィング（一七九二—一八三四、当時長老派の牧師）、F・A・コックス（有名な洗礼派の牧師）等である。他の一群は急進論者たちで、J・ベンザム（二七四八—一八三二、法律家、功利説を述べる）、J・ミル（一七七三—一八三六、スコットランドの哲学者、経済学者）、その子のJ・S・ミル（一八〇六—一八七三、哲学者）等であった。

宗教的色彩のない、教育課程を幅広く教える新大学創立の原動力となつたのは、T・キャンベル（一七七七—一八四四）である。彼はグラスゴー大学の出身であった。彼は一八二〇年ドイツを訪れ、新設のボン大学（一八一八年創立）のすばらしさにびっくりした。彼はロンドンに大学を設立する意気込みで帰国した。多数の人々が彼の主張を支持してくれた。ただ建設に要する資金が集まるかどうか、この点に不安があった。そこで彼は「タイムズ紙」に一文を草し、それは一八二五年二月九日の紙上に掲げられた。

彼はこの文章の中で、最近貧乏な人々の間にも高い教育への要求が強くなっていることを述べ、彼が提案しようとする大学の構想を次のように述べている。「大ロンドン大学の創立です……われら中産階級の一五歳から三〇歳、或はもっと後までの青年に、効果的に種々のことを教授

し、試験を実施し、修練を積ませ、その結果に優等賞を与えうるような研究機関であり、また公教育と私教育のよい面が結びつけられている大学（学校という公の場に、工場内の徒弟教育や成人教育の場を大学内に設けるというような）、学生に行う試験や一般に提供される賞によって競争精神にみちている大学、自宅から通学するので学費が低額ですむこと、その他家庭から通学することによる道德的に良い面が多いが、これらの長所が結びあつて良い結果をもたらす、このような大学の計画であります」。^(注16)

彼は騒ぎをおこすまいと考え、宗教については述べなかった。新大学では神学の試験は廃止し、各種の科学、現代外国語を広く採用する教育課程が考えられていた。彼の訴えは直ちに熱心な反響があった。発表五日後の一八二五年二月一日には、J・ミルその他有力者が会合し、計画実施について協議した。

直ちに資金の募集にかかった。一株一〇〇ポンドとして売出した。六ヶ月間に一万ポンド集った。校地はゴッワー街に確保され、学長には英国学工院会員J・ホーナーが任命され、一八二八年一〇月三〇名の学生を入学させ、ここにどの神学とも関係のない新大学が発足した。学生数は翌年二月には五五七名となった。

しかし、大学は法律上は「株式会社」である。学位授与権は認められていない。早く勅許状が許可されるようお願いしているが、「大学は神の存在を否定している」^(注17)という理由で許可されなかった。これはイギリスの世論をわきたたせる大論争となった。無神論の大学に賛成するタイムズ紙、モーニング・クロニクル紙等。これに反対し教育は宗教の基礎の上に築かれるべきものとする、スタンダーズ紙、モーニング・ポスト

紙等である。この問題に解決を与えようとしたのが第二のカレッジ、キングズ・カレッジの創立である。

(2) キングズ・カレッジ

キングズ・カレッジの創立最大の功労者は、ジョージ・ドゥイリー博士（一七七八—一八四六）である。彼はケンブリッジのコープス・カレッジ卒業後、一八〇一年母校の特別研究員となり、聖職位を受け、教授をつとめた後、一八二〇年にロンドン南部の自治区ランベスの主任牧師となった。彼が赴任した当時人口は五八、〇〇〇人であった。所が人口は急増し続け、（彼が没した一八四六年一三万一千人）彼は東奔西走して一三の教会建設に成功した。また彼は「キリスト教知識普及協会」「福音伝導協会」の活動的な理事でもあって、カンタベリー大僧正の信頼があつた。

キングズ・カレッジ創立の第一歩となつたのは、ドゥイリーがロンドン大学について一八二八年の初め、ロバート・ピール（一七八八—一八五〇、当時内務大臣で、彼は教育の根本に宗教をおくことを熱心に支持していた、その後首相に二回就任した）宛の公開書簡である。その要旨は、

第一に、イギリスには大学をもっと設立すべきである。その理由は人口の増加、中産階級の勃興、知的改善についての欲求が高まっている。

第二に、ロンドン大学は第一の目的をいくらかみたしてくれるが、首都の青年の上にもたらす学問的利益も、教育課程の中にキリスト教的信仰に関する教科が全然ないことからくる、道徳的宗教的欠陥によって、その効果が半減しているものと考ええる。

第三に、ロンドン大学が設立された原則、即ち大学から宗教を追放することは、イギリス王国の青年の一般的教養のための公の機関としては、本質的に誤っている。

最後にドゥイリー博士は、この問題の解決方法として次の三点をあげている。1、オックスフォード、ケンブリッジ両大学を拡大すること。2、イギリス北部に新大学をつくること。3、ロンドンに第二の大学をつくり、この大学では教育方針としてイギリス王国で認められているキリスト教の信仰を青年に植えつけることとする。

以上の公開書簡の反応は早かつた。二つの大きな反応、その一つは、ゴッワー街の新大学で、一八二七—一八二八年の間に、イギリス国教会に属する聖職位をもつ教授が、三名も任命された。もう一つは、一八二八年の半ば頃、イギリス国教会の信仰の上に立つ新大学、即ちキングズ・カレッジ創立計画が発足した。

ドゥイリー牧師のランベスにおける活動は、大僧正C・マナーズサットン博士の熱心な支持をとりつけていた。この支持の効果ははかり知れないほどであった。大僧正は王室とも関係の深い第三ランド公の孫に当り、多くの貴族と親交がある。内務大臣ピールと大僧正は、新大学の計画を推進するために、ウェリントン首相と有力関係を説得することに成功した。設立のための事前工作が進められた。

一八二八年六月二一日、新大学設立のための公開の会合が、フリーメーソン・ホールで開催された。首相が議長席につき、その周囲にカンタベリー大僧正外二名の大僧正、ロンドン僧正外六名の僧正、ピールとアバディール（二名とも後に首相となっている、又この会で多額の寄付を約束した）、その外に多数の牧師が出席していた。

議長席についたウェリントン公（一七六九—一八五三、ナポレオン軍をウオターローで破った將軍）は、開会に当りこの会の招集の目的を述べた。この国は本質的にプロテスタントの信仰の上に成立している、それ故この国の宗教が教育の根本にあるべきことは当然のことである。宗教教育を除いた教育は、役に立たないというより害毒を流すというべきである。新しい大学ではイギリス国教会の信仰の上に、有用な科学と芸術の研究がすすめられるべきものとする。最後に彼は次のことを提案し、万場一致でその実現に努力することが決議された。

一般教養のための大学が首都に設立されるべきこと、教科内容は文学と芸術の分野にわたると共に、イギリス国教会が教えるキリスト教信仰の教義と義務を、青年に教えることも教育組織の中の重要な一分野とする。さらに彼は語をついで、国王はこのカレッジの設立に喜んで承認を与え、王の保護下におき（勅許状によって法人化し、財産の保有又は処分、学位授与を保証するという意味）、大学名を「ロンドンの国王のカレッジ」とすることに内諾を与えておられる、と。

次にカレッジの基本的計画が承認され、準備委員二七名が指名され、中心となって計画をすすめる事務局長にH・N・コレリッジが任命された。

建設資金募集

建設資金は次の二つの方法によった。

- 1、寄付募集による寄付金
- 2、株券による募金（四％以内の配当をつける、一株一〇〇ポンドの株券の販売）

以上の二方法による資金が一〇万ポンドに達した後に、建設事業を開

始することとした。第一回の寄付申込みと株券の申込みは、公開会合の日に始まり、四日後には合計三〇、七九四ポンドに達した。その内訳は寄付金二〇、〇九四ポンド、株券は一〇七株で、人員は二四二名、内八名は牧師であった。その年の七月ロンドン市長のもとで重要な会が開かれ、新カレッジの創立に協力する二人委員会が発足した。この後このような協力会が、リボン、リバープール、ノーウィッチ、ヨーク等全国各地に発足した。一八二八年八月一九日建設資金は一〇二、〇〇〇ポンドに達したと秘書が発表した。次に第二次募金目標を一〇万ポンドと発表した。

勅許状は一八二九年八月一日発行された。校舎建設は六三、九四七ポンドで入札された。新学長にはウィリアム・オッター師（兼神学講師）が任命され、キングズ・カレッジが発足した。

(3) 総合大学ユニバーシティ・オブ・ロンドンの創立

第二のカレッジ、即キングズ・カレッジの勅許状は発行されたが、第一のカレッジ、即「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」の勅許状はまだ発行されていない。勅許状の獲得運動は続けられ、一八三六年二つの勅許状が許可された。一つは、第一のカレッジを「ロンドン・ユニバーシティ・カレッジ」と改称し、これを法人化する勅許状である。もう一つは、既に存在している二つのカレッジを綜合する大学に「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」の名称を与え、オックスフォード並びにケンブリッジについて第三の綜合大学とし、学位を授与する権限を許可する勅許状である。

これから後ロンドン大学に属する各学部が、次に新設され、又は他か

らの寄付で移管されることとなる。次にその主なものを記しておく。

医学部付属病院（一八四一年）、工学部（一八三八年）、神学部（一八四六年）、キングズ・カレッジ・スクール（一八四六年、一六歳以上で各学部に入學するための準備学校である。創立当時生徒はもう五百名いた）。

一八五五年新設された夜間学部は新しい分野の開拓事業ともいふべきものであった。初年度の学生数は三四五名で、学習している学級と在学生は次の通り。旧約聖書（五六）、新約聖書（五二）、ギリシア語（七）、ラテン語（三四）、フランス語（六四）、ドイツ語（一九）、英語（三二）、歴史（一九）、数学（三七）、商業（二〇）、絵画（九）、化学（八）。講義時間は午後七時半から二時間、授業料は年間（期間は一〇月から翌年三月まで）一ギニー半（凡そ一ポンド半）、これは昼間部の半額である。学生は三年から四年も受講し、学位試験を受けることができる。この学部の学生は漸増し、一八六五年には六五四名となった。^{〔注19〕}

従来もこれに近い、例えば「ロンドン機械研究所」という施設があったが、成功しなかった。それは組織的でなかったからである。組織的には、優秀な教授陣容、教材教具等の整った教育施設、意欲的な学生、そしてこれらが継続的に維持される、法的、経済的基礎をもっていることである。この意味からキングズ・カレッジの夜間学部は成功していた。

大学の三大任務

以上のような六〇年の発展の過程をへて、「ユニバーシティ・オブ・ロンドン」の事業は、一八九八年教育法によって次の三任務が与えられた。

1、教授と研究 ここに学ぶ学生を「学内生」と呼んでいる

2、学外生の学位試験 学位授与権のない大学生のための学位試験の実施

3、大学の一般公開講座 これは一般学外の希望者のための、長期又は短期の公開講座である。^{〔注20〕}

以上が一九〇五年以前の概要である。

3 ゴールドスミス・カレッジの創立

(1) ゴールドスミス・カレッジ

ロンドン大学評議員会は一九〇四年十一月、ゴールドスミス同業組合からの寄付申請を受入れ、同組合の名称を冠するゴールドスミス・カレッジを創立することを決定した。新カレッジを運営する常任委員会の委員には、ロンドン大学の評議員八名（内一名は議長となる予定）、ロンドン市庁代表二名、ケント州、サリー州、ミドルセックス州、クロイドンの代表各一名、ゴールドスミス組合代表二名、この外に大学総長と教育学教授の一八名で構成され、初代議長にはサー・エドワード・バスクが就任した。学校の名称は「ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ」である。大学評議員会が推せんした施設は次の通りである。

- (i) 教員養成学部
修業年限は二年課程とし、学生の定員は四〇〇名（後に五〇〇名に増員）
- (ii) 文学と科学の昼間学部
- (iii) 工学の夜間学部
当分の間工学の学位をとる準備をする
- (vi) 美術工芸学部

教員養成学部は財政的には、教育当局が負担する人頭割補助金一人当一〇ポンドと、この学部^(註21)に学生を派遣するロンドンその他の教育当局が予約している座席数への保証金一人当二六ポンドによって、自活するものと考えられる。

文学と科学の昼間部はゴールドスミス組合が向う五ヶ年間年五、〇〇〇ポンドの補助金を提供する約束なので、当分の間運営されると思われる。

夜間の学位目的の学部と美術、工芸学部は、もしロンドン市庁が年六、〇〇〇ポンド負担するならば経営可能である。

ロンドン市庁と隣り合わせのケント州その他の州の教育当局の協議会がもたれた。その協議では一九〇二年教育法以後の発展のために、ロンドンとその周辺の教育当局は、管内の教師たちに大学教育を要求すべきこと、非教派的な昼間の、大学が直接管理する教員養成機関が設立されるべきこと、そしてこれは最近ロンドン市庁が大学の教育学教授を学長として設立した昼間の教員養成カレッジと同様の課程をもつ、男女教員とも二ヶ年間、一般教育と訓練とを受ける学部とすること、で意見が一致した。

次に予約して保留される座席の割当について協議し、ロンドン（一八五）、ケント、サリー、ミドルセックスの三州（各々九二）、クロイドン（三九）とし、総定員を五〇〇名と決定した。^(註21)

初代学長W・ローリング

大学評議員会は一九〇五年早々、ウィリアム・ローリングを初代学長に任命した。彼はケンブリッジのキングズ・カレッジで学位を受け、特

別研究員となり、その後ヨークシアの教育局長をつとめていた。（ローリングについては別に述べる機会がある）。

次にカレッジの常任委員会は教員養成学部担当の副学長として次の二名を任命した。カーディフ大学教育担当教授であったトーマス・レーモントと、リバープール大学教員養成学部の教師であったカロライン・ダレーブソン嬢である。以上有能な三名の教師の手に、この新設の教員養成大学経営上の、大学規則並びに細則の制定が委嘱されることとなった。これは従来のカレッジとはちがいが、教派色は全くなく、男女共学の、しかも通学制の大学である。

大学総長ローズベリー卿は一九〇五年九月二九日、ゴールドスミス組合事務局長から金の鍵を受取り、ゴールドスミス・カレッジの開学を宣言した。総長は感謝の念の厚い、しかも英知あふれる演説をされた。ロンドン市庁の市長サー・ウィリアム・コリンズは、ロンドン市庁を代表して、次のように挨拶された。われらの中等学校では一年に一、〇〇〇名の教師を要求している（この市長の管轄はロンドン・シティを除く大ロンドン全域を含んでいる）。それ故このカレッジの設立運動に喜んで参加している。このような教員養成カレッジがその効果を發揮して、教師という職業がもはや生活に困った人の避難所ではなく、高い学問を要し、自由な専門職と考えられるよう望みたい、と結ばれた。^(註22)

(2) 教員養成学部

初年度（一九〇五—六）の入学生は二五〇名で、そのうち男子学生は一〇三名、女子学生一四七名、平均年齢は男子二一歳、女子二〇歳半であった。またこのうち二四六名はロンドンその他の州からの自由席入

学者で、ウェルズ地方からの入学者は男子三十六名、女子七名であった。

第二年度になると二年課程が完成する。学生数は合計四九七名となった。第三年度は五一五名、男子一七八名、女三三七名となり、平均年齢は一九歳となった。

二年間の教育課程は、一方では大学の教育課程編成委員会の勧告があり、一方では各教育当局の採用試験の方向を考えて編成される。教員養成学部^{ナイス}の試験は最初から（現在もそうだが）大学当局が管理し実施してきた。

教職員の任命

一九〇五年夏、この学校の教職員の任命が行われた。その中の一部を紹介しておく。

I・B・ジョン、英語学と英文学担当、後にハル教員養成大学長となる。

D・L・セーボリー、フランス語とドイツ語担当、後にベルファーストのフランス語教授、一九五二年勲爵士^{ナイト}に叙せらる。

ル・F・ウンステッド、地理学

E・フィッツゼラルド、化学と物理学、彼は一九四五年まで四〇年間教えた。

J・ケリー、手工と数学

ナンシー・キャティ嬢、英語、歴史、数学、後に教育学を担当。外は略。

教師の報酬

最初の頃は一五〇ポンドから三〇〇ポンドの間、平均二〇〇ポンド。

住宅は誰にも支給されていない。

カレッジの建物は教授用のみに使用され、教師も学生も住んでいない。美術工芸学部が発展するにつれ教室不足をきたし、ゴールドスミス組合は毎年の寄付金（五、〇〇〇ポンド）の外に、八、〇〇〇ポンドを寄付し、カレッジの南側に増築した（一九〇七年）。

同じ年カレッジの後方に、上の運動場が拡張された。これはロンドンのブライトン（イングラッド南部のサセックス）行き南岸コース鉄道会社から借入れたものである（この土地は一九二七年に買取され、カレッジの所有となった^{注23}）。

寮の建設

居住施設が全然ないということはカレッジ発展のためには欠陥となっていた。第一の宿泊寮はケント州評議会がグランヴィル公園内に一九〇七年一月建設した。これは女子学生三四名を収容することができた。

第二の宿泊寮はその三ヶ月後カレッジの近くに完成した。サリー州協議会がつくり、女子学生四四名を収容することができた。第三の宿泊寮は国民協会（貧民教育推進のためイギリス国教会派が設立した協会で、資金量は多い^{注24}）がイギリス国教会会員の女子学生（三〇名収容）のために建設した（今はなくなっている）。

ミドルセックス州評議会は同様に宿泊寮を建設するよう圧迫されたが、その希望は一九一二年まで実現することができなかった。

カレッジの建物、住居としての寮、集会場の維持は大きな問題であった。大学常任委員会は年々の取入を積みたてておいた金以外は、宿泊寮を建設する資金はなかった。そんな困難な時代ゴールドスミス組合は一九一二年、お別れの贈物として僅かの地代しかついでない二つの宿泊

寮を寄付した。男子のためのクライド寮、女子のためのペントランド寮が翌一九一三年完成した。これで女子寮五、男子寮二となり、収容能力は女子二〇〇名、男子六四名となった。^(注25)

この頃宿泊寮の建設が困難であったのは、文部省は大学が建設するものには補助はしないが、地方教育当局がその学生のための宿泊寮には七五%まで補助金をだしていた。この矛盾はマクネール報告書が出されて解消した。

マクネール報告書

一九四四年教育法の最大のねらいは、全国民に中等教育を施すことである。それだけの学校を整備するための最大急務は教員の養成である。

この件について具体的に研究し、協議し、その結論を報告したが、サ
ー・マクネールを議長とするこの報告書である。^(注26)

(3) カレッジの改造案

ロンドン市庁教育当局は夜間学部と工芸学部に適当な援助をするようになった。ロンドン大学評議会もその管理下の施設に興味を抱きはじめた。しかしゴールドスミスの全施設が評議会の管理に移されなかったことに不快な感情をもっていた。

ゴールドスミス組合からの年補助額は五、〇〇〇ポンドだった。大学評議会は補助の延長を組合に要請し、その結果三年間延長されることとなった。所が地方教育当局は、教員養成学部保留している座席料を、一人当り一六ポンドを一三ポンドに引下げることとなり、ロンドン市庁教育当局は、一九一〇年一月一八五座席の学生指名数も取下げる意向を発表した。他の四州(ケント州外)はゴールドスミス組合が五、〇

〇〇ポンドの補助を続けるならば、支持を続けると発表した。ゴールドスミス組合は一九一二年以後は継続しないことに決定した。ゴールドスミス・カレッジの将来に不安感がみなぎっていた。これは大学内の対策が不確実であった為である。

ロンドンにおける大学教育について、王立調査委員会が一九〇九年出版した。議長はホルデーン卿(一八五六一一九二八、政治家・哲学者)で、三年間に七二回の委員会を開いた。この委員会の審議の結果は、ゴールドスミスカレッジの常任委員会が既に一九一〇年三月委員会に提出していた経営方針に重大な関係があった。この経営方針には次のように述べられている。

このカレッジはまだ大学の養成所とはなっていないのに、夜間の科学科には五三名、教員養成学部には四名の学内学生(学位をとるための学生)がいる。これらの学生は大学評議会が、普通学位を目標に正式の教授のもとで学問するよう、許可した者のみである。教員養成学部では大学は学生への教授と、学位授与の試験の両面を管理し、自由な状態のもとで多くの新施設と経験を与えながら、この学部は発展してきた。カレッジ常任委員会はあらゆる段階の教員養成に最大の重要性を与え、これこそロンドン大学が負うべき義務であると認めている。常任委員会はこのカレッジが大学の一学部となることを願っている。ただその障害となるものは財政的に不安定なことである。(固定取入はゴールドスミスからの寄付金年五、〇〇〇ポンドのみで、それも一九一二年までの約束である)。

大学協議会はこの点について、ゴールドスミスの補助金以外に大学の資金をつぎこむのでなければ、工芸学部と教員養成学部(文学士の学位

を求める昼間の学級を含める）を引続き経営することが望ましいことと考えていた。彼等はゴールドスミスカレッジを、ユニバンティ・カレッジ又は大学の正式な学部とする政策には熱心ではなかった。

しかし、ロンドンの南地区の人々は熱心に望んでいた。一九一一年一月、デトフォード自治区（ロンドン南東部）の市長は、隣り二自治区の支持のもとに、ロンドン大学の評議員会へ、南ロンドンの人々のためにゴールドスミス・カレッジを大学のカレッジとされるよう、請願書を提出した。

ロンドン大学評議員会の態度は慎重であつた。彼等是一九一一年五月ロンドン市庁教育当局が留保座席（一八五）を停止した後の、不確かな教員養成学部の地位について話し合いたい意向を示していた。彼等は工学と建築学部を評議員会が既に確保している（一九〇八年）新しい敷地に移転させること、美術工芸学部を今後も維持すること、科学学部の維持のため夜間学部に学位課程を設けるために、ロンドン市庁教育当局の充分な経費負担を懇請した。

大学評議員会はまたこのカレッジに文学と科学課程（学士号を請求できる程度の）を設け、大学程度の教授を導入したいと考えている。そのためにロンドン市庁教育当局が必要経費を負担する必要がある。この負担額は資本支出（敷地建物等の増設費）として七、〇〇〇ポンド、維持費は年一〇、〇〇〇ポンド程度である。評議員会の経済的支持を望む書簡は、ゴールドスミス組合におくられた。だが組合側からは色よい返事はなかった。ロンドン市庁教育当局は大学評議員会がゴールドスミスカレッジを、大学の一学部として許可してくれるのかどうか、疑問をもっていた。そこで大学評議員会は一九一一年一月、ゴールドスミス・カ

レッジを夜学生のための大学学部としては認めないことを決定した。

最後の頼みはさきに発足したロンドンの大学教育についての王立調査委員会の結論である。一九一三年三月委員会の報告は、大学の学問的研究事業はロンドンのブルームズベリー（大英博物館等のある北部地区）に集中させること、大学の学位課程、大学院課程をチームズ河南岸におくことは不可であるという。ゴールドスミス・カレッジが大学の工芸と科学の夜間学部であるべきだという提案については、委員会は自分の間ただ一つのセンターである、バークベック・カレッジだけでよいと述べている（医師バークベック（一七七六—一八四一）は一八二三年ロンドンに「機械研究所」を創立し後にロンドン大学に寄付した）。ゴールドスミス・カレッジは初等教育学校教師のための昼間制教員養成学部とし、ロンドン市教育当局所属の美術、工芸学部も現在のままですんではしい。その他ゴールドスミス・カレッジに属する学部は廃止し、建物は夜間、土曜日の午後、日曜日の昼間、「労働者教育協会」の「開放講座」^{フットリプル・クラス}に充たさるべきこと、そしてその教育の組織と指導に責任のある学長のために、大学構内に住宅が建設されるべきであると勧告した。

カレッジの常任委員会は労働者開放講座のセンターとすることに反対し、ロンドン市庁教育当局外四教育当局も一九一四年早々会合し、次のような結論をだした。もし学位課程がなくなれば、カレッジの有用性がなくなる。もしカレッジが労働者開放講座センターとなるのであれば、四教育当局は将来全然支持しないこととする。この意見は強硬であつた。このような意見が続出する中で、カレッジの常任委員会は大学評議員会への書簡の中で次のような案を申し出た。

第一は、キングス・カレッジをここ（ニュー・クロス）に移し、ゴー

ルドスミス・カレッジを吸収し、大ユニバーシティ・カレッジを建設すること（これはキングズ・カレッジの常任委員会が拒否した）。

第二は、色々な学部をもつ教員養成カレッジと、大学の教育的事業の発展である。この中に次のような課程を含んでいる。

- (1) 三年課程に特殊教科の教員養成（学問的な教科、工芸、体育を含む）をおく。
- (2) 障害児教育に当る教師養成（盲、ろう、精神薄弱児等）
- (3) 幼児のための教師養成（カレッジ内に模範学校を建てて養成する）。
- (4) 中等学校に勤務する教師の養成。
- (5) 美術工芸学校と連絡をとって美術の教員養成に当る。

さて、教員養成学部はロンドン市庁教育当局の保留席（一八五）が中止され一時危期に陥ったが、広く全国から学生募集をして危険を脱した。一九一三―一四年には在学生四五七名となり、はじめて男子学生が女子学生より多くなった。男子学生の入学年令は二一歳であった。

夜間科学学部と美術工芸学部の出費がかさみ、不足金は年間二、〇〇〇ポンドとなった。この毎年の欠損はゴールドスミス組合の補助金でどうにか切り抜けていた。^{〔注27〕}

労働者教育協会

イギリスの成人教育の先覚者アルバート・マンスブリッジ（一八七六―）によって、一九〇三年「労働者の高等教育推進協議会」が結成され、一九〇五年「労働者教育協会」（W・E・A）が発足した。（一八九九年発足したラスキン・ホール（一九〇七年ラスキン・カソッジと改

称）と共にイギリスの成人教育運動の二大潮流となった）。

マンスブリッジはイギリス国教会の説教師で、彼にとっては教育による救いは、キリストによる救いの中の重要な部分と考えられていた。彼は福音伝導の熱情をもって成人教育について説き、彼の熱のこもった信念は、働く人々の多数の熱心な支持と、教会と大学に大きな影響を与え得る人々の理解と友情を勝ち得た。W・E・Aは全国に五〇支部、会員は五、〇〇〇名以上となった。その中にチャールズ・ゴア（一八五三―一九三二、ハロー・スクールからオックスフォードのバリオール・カレッジ、後にバーミンガム僧正等をつとめた）、ウィリアム・テンプ（一八八一―一九四四、彼はラグビー・スクールからオックスフォードのバリオール・カレッジ、後にヨーク、カンタベリー大僧正となり、又W・E・Aの総裁を一六年間も勤めた）等の有名人がいた。^{〔注28〕}

大学開放講座

一九〇六年ロンドン大学内で行われたある会議で、労働者の高等教育のための長期講座はどうかということが論議され、この講座を具体化するための委員が任命された。

一九〇七年の秋パトリック・ゲデス（一八五四―一九三二、生物学者、社会学者、彼はロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ内のハクスレー実験室で生物学を研究し、植物学の教授、その後社会学、市民学の教授となった）が、ロンドンの南西部の都市のW・E・Aの支部で、市民学（公民学）について一〇週間の連続講座を開いた。この話しを聞いたW・E・Aの一グループはマンスブリッジと相談して、一九〇八年一月ロッチデール（マンチェスターの近くの都市）において、R・H・トニー

ー(一八八〇)、歴史家、彼はラグビー校、ベリオール・カレッジ(オックスフォード)を出て後、グラスゴー大学助手、ロンドン大学経済史教授)を講師として三年連続の「経済史」の講座を開いた。出席者は四〇名で、全員出席した上で論文を書くことを誓った。これと同じような講座がオックスフォード公開講座主催で、ロングストン、スタッフォードシア、その他の都市で行われ、オックスフォードのニュー・カレッジは、この運動のための費用として三〇〇ポンドを支出していた。

これは極めて重大な経験であったが、トーニーの献身的な努力で成功した。彼はこの頃グラスゴー大学の時間給助講師であった。彼は毎週金曜日の夜ロングストンの講座に出席し、土曜日の午後はロッチデールの講座に出席した。彼は日頃トインビー・ホール(一八八四年バーネット牧師がロンドンの貧民の教育とレクレーションの施設として創立し、後若くして没した有名な経済学者で労働者の友であったアーノルド・トインビー(一八五二―一八三三)を記念するため改名された)とW・E・Aに接近し、労働者階級の要求に理解があった。

その後労働者の地位向上をはかる目的で創立されたラスキン・カレッジ(後出)、オックスフォードなどの各大学の協力のもとに、開放講座は各地に設けられ、一九一三―一四年に全国では一四二学級(三、〇〇〇名以上の受講者がいた)あり、そのうちロンドンには三〇学級、オックスフォードに一八学級、マンチェスターに一七学級、リバプールに一六学級があった。^(注29)

ラスキン・カレッジ

労働者のための成人教育機関として、一八九九年ロンドンにラスキン

・ホールが創立され、一九〇七年ラスキン・カレッジと改称された。この創立は極めて奇妙なものである。最初アメリカ生れでオックスフォードに在学していた、ブルーマル外二名の者たちが先唱して設立された。三名の者はジョン・ラスキン(一八一九―一九〇〇、イギリスの著述家、社会改良家)の崇拜者で、労働者階級の指導者に欠ぐべからざる主要課題について教養と訓練を与える、この宿泊施設のある機関を、ラスキン・ホールと命名した。

講義は歴史、経済、政治学、古典語、論理学等にわたり、講師は大学から招いた。最初の頃はブローマン自身が学寮長をつとめ世話していた。学費は住宅・月謝その他で年額五二ポンドの低額であった。管理委員としては労働組合会議(T・U・C)の代表が就任し、学生は労働組合員や協力資金による奨学生等であった。ブルーマンがアメリカに帰国して後は、労働組合会議が主導権を握ることとなった。^(注30)

(4) 第一次世界大戦

一九一四年夏(七月二八日、オーストリア、セルビアに宣戦)第一次世界大戦がはじまった。学生数は夜間学部と工芸学部で半分となったが戦争中この数を維持した。最も資金を要した科学学部は一九一四―一五年の学期末に閉鎖された。

工学と建設学部は計器計量製作者養成事業に切り換え、ロンドン市庁教育当局に属する手工業教師によって、数万箇の軍需用計器が製作された。製品は軍需大臣から高く評価された。

教員養成学部の学生は四五七名いたが、大戦第一年に一〇〇名減少し、第二年目にはカレッジ最低の二八三名にまでおちた。一九一四年学長と

職員四名、学生五三名が軍務に服した。

女子学生は次第に増加し、戦争の終り頃にはロンドンに生命の危険があるにも拘らず、三〇〇名を越した。教員養成学部約一〇〇名の学生が学業を終る前に軍務を志願した。ゴールドスミス組合員約六〇〇名が軍務に服した。

軍務に服した人々が受けた勲章には、最高勲章一名、十字勲章一名その他となっている。次に戦死者は、教師陣からは学長ローリング大佐外一名、事務員一名、教員養成学部学生九二名、夜間部工芸学部学生一名、合計一〇六名の多数に達した。^{〔註31〕}

W・ローリング学長の戦死

彼は一九一五年一〇月ガリポリ沖（エーゲ海から黒海に入る途中の半島）の病院船で、戦傷のため戦死した。彼は勇敢な兵士で、ボア戦争（一八九九—一九〇二、南アフリカ戦争）でも戦功をたて、二人の兄弟も既に戦死していた。

彼は一八六五年に生れ、イートン校からケンブリッジのキンゲズ・カレッジにすすみ、在学中二つの奨学金を受け、卒業後は母校の特別研究員となった。その後ギリシアのアテネで四年間考古学の研究に従事し、次に教育当局の職員に任命された。彼は義勇農騎兵（一七六一年自由農民階級の子弟で組織された義勇兵団、ボア戦争でこの名称を得た）に入隊し、ボア戦争では戦傷を負い、殊勲章を受けた。

一九〇二年教育法施行後、彼は三年間ヨークシアの教育局長をつとめ一九〇五年ゴールドスミス学長に就任した。

彼は一〇年間学長の職について、ゴールドスミス・カレッジの創業に参

加し、その基礎を築いた。また教員養成大学協会会長としても数々の功績があった。彼は大戰勃発と同時に、一九一四年八月直ちに騎兵連隊に入隊した。約一年間海岸警備隊で服務し、その後地中海におくられ、ガリポリの戦斗に参加したのである。大学常任委員会の記録には「彼の性格の影響によって、彼は非常に高貴な風格を大学に与えた」と記している。^{〔註32〕}

第一次大戰後の充実

第二代学長レイモント

彼はローリング学長出征中の学長代理であった。一九一九年二月、正式に学長に任命された。一九一八年女子学生は三三四名となっていた。

三学部の学生数は休戦後急速に増加した。一九二〇—一九二一年の各学部は次のようであった。

- 1、美術工芸学部 戦争最後の年は九九名となっていたが、すぐ二四七名となり、内九三名は全日制の学生であった。
- 2、工学と建築学部 定時制の学生は、三五〇名から一、二二六名となった。
- 3、教員養成学部 三三〇名の学生が五六〇名となり、内五〇名は学士課程に在学中であった。

さらに次の課程が加えられた。

一九二二年、大学の学位をとる大学院課程が設けられた。

一九二四年、自然科学学位課程が設けられた。

伝導事業に従事する教師のための短期特殊課程が設けられ、一〇〇名以上の学生がこの課程を通過した。

王の視学官の試験

一九二二年、王の視学官の一行が教員養成学部において、期末試験を綿密に実施した。その結果は極めて優秀と判定された。

一九二七年、レイモント学長辞任、第三代学長にアーサー・ディーンが任命された。

教員養成学部学生は五二四名となり、この内一〇〇名以上は大学院に在学し、五学科に教授五名、一九二八年学位を授けられた者、美術科一三名、自然科学一一名、内優秀賞を受けた者五名であった。

学生定員の増加

文部省は将来義務教育年限の延長を予想し、従って教員不足となることを見こし、学生定員の増加を許可した。一九二五年三五名、一九三〇年二〇名。これで五七六名（男二四一、女三三五）となり、内四〇五名は一一の寮に生活していた。

特殊三年課程の設置

議会側の手落ちで学令見年令引上げ法案が流れ、従って教員が過剰となることわかつてた。一九三〇年一年に一〇〇名引下げることとなり、この痛手を少くする方法として、美術、工作、音楽、数学、生物学英語等に、三年課程を設けることとなった。一九三〇年代この課程に三〇名の学生がいた。

養護教員養成三年課程の設置

新たに遅進児、精薄児、学習困難児のための教員養成が開始された。

体育科高等部の設置

この課程は一九三七年設けられ、大学卒業生を含む二〇名が幅広い教育課程で勉強している。学科の中にはアップルトン教授（セント・トーマス・ホスピタル医学校教授）が指導される、解剖学や生理学も含まれている。

一九三〇年代の不況対策

世界的経済の不況はカレッジの経営をゆさぶった。文部省は学生一人当りの人頭割補助金を、一人当三ポンド減額し、学生の定員を五八〇名から、五二五名、四九八名（一九三三年）、四三五名（一九三四年）へと引下げた。

ローリング寮の建設

カレッジ常任委員会は一九三九年、凡そ一〇哩離れているノース・グレイに運動場を買入れ、この一角に女子学生のために寮（二八名収容）を建設し、これをローリング寮と命名した。第一代学長の名を残すためである。土地買収費、建設費その他一切で一四、〇〇〇ポンドかかったが、これは全部カレッジ資金から支出された。

一九三八年九月、ミュンヘンの危機が訪れた。翌年第二次世界大戦に突入した。^(注33)

(5) 第二次世界大戦

大学の疎開

一九三九年四月、ゴールドスミス・カレッジ学長、ユニバーシティ・

カレッジ学長、ノッティンガム州教育当局、この三者の協議で、ロンドンの二つのカレッジの疎開がきまった。戦争勃発（一九三九年九月英仏対独宣戦布告）と同時に大学の疎開が開始された。寮の家具類や陶器類、図書館の図書等を満載したトラックをつらねて移動した。ノッティンガムの受入れは極めて友好的であった。一九三九年一〇月四日から、ノッティンガムの大ホールで、四〇〇名（男二五〇名）の学生を集めて講義が開始された。宿泊施設も提供され、女子学生二二〇名、職員六名、学長及びその夫人も居住していた。

ロンドンに残した建物は市民防衛に提供された。成人教育部は暫く中止、工芸学部は昼間学生のみとし、規模を小さくした。

ゴールドスミス合唱団

ロンドンに残った教師たちは学生たちと積極的に連絡をとりつつ努力していた。特に著しい活動をしていたのは、ゴールドスミス合唱団である。これは後にロンドンの合唱団の一つとなった。この合唱団のおこりは、凡そ一〇年はど前に夜間部の学生によって結成されたものである。彼等はハギス教授の指揮のもとに、カレッジの大ホールで公開合唱会を度々催していた。

文部卿の訪問

一九四二年の記念すべき事件は文部卿のノッティンガム訪問だった。バトラー氏は教師養成事業に大きな関心をよせ、ノッティンガムに二日間を過し、この間に三つのカレッジの職員と学生との意見交換をした。

またマクネール委員会の委員（一九四四年教育法では全国民に中等教育を授ける学制の大改革を実施した。このために必要な教師養成の問題を取扱う委員会がこの委員会―前出）数氏もゴールドスミス・カレッジ

を訪れていた。学長はロンドン大学内に教育大学を拡大する計画をたてる、小委員会の委員に指名された。カレッジ常任委員会も後の改革案を練っていた。^{（注34）}

ロンドン復帰

戦争が終る二年も前から復帰計画が練られていた。カレッジの建物が破壊され、修理費は一九四四年四月二三、〇〇〇ポンド認められた。しかし工事は労働力不足、資材不足のため順調にすすまず、工事費は二五、〇〇〇ポンド（一九四六年）追加され、一九四六年の復活祭（三月下旬）に教員養成学部が帰ってきた。修理工事は一九四七年までに総額一〇万ポンドをつぎこんで終了した。

ロンドン復帰記念集会は、大学総長アスロン卿とその妻アリス王女の臨席のもとに、一九四七年五月行われた。この日はカレッジにとって意義ある日であった。カレッジの常任委員会議長サー・S・マーチャントが大ホールでの集会の主催者となり、文部大臣、ロンドン大学評議員、ゴールドスミス組合代表、ロンドン市庁の教育当局、各州教育当局、デットフォード自治都市市長、ノッティンガム・ユニバーシティカレッジの代表等が参会者であった。アスロン卿はその挨拶の中で次のように述べられた。このカレッジは四二年前開校されたが、私自身の家にとってには特に関係が深い。即一八九一年のゴールドスミス研究所の開所式は皇太子（後のエドワード七世）出席のもとに開催され、一八四三年王立海軍学校の定礎式にはコンソート皇太子（アスロン卿夫人アリス王女の祖父）が出席された。と王室と極めて深い関係にあることを力説し、最後にゴールドスミス組合に賛辞をおくり、大学の管理の優秀さをたたえ、

学生諸氏が一層充実した大学生活をおくるよう希望すると、結ばれた。^(注35)

(6) 学部の実施

大学の建物が整備されるにつれ学生数も急速に増加し、一九四七—八
年三、〇〇〇名、そのうち七五〇名は全日制の学生であった。翌年は
四、〇〇〇名となった。教職員は三学部で一四〇名をこえ、そのうち四
三名は専任であった。次に各学部の概要について述べる。

a 教員養成学部

一九四四年教育法はイギリスが第二次大戦後の世界に臨む姿勢を示
すものである。この教育法では地方教育当局に、初等、中等、継続教
育に必要な措置を講ずることを命じ、生徒各人の年齢、能力、特性お
よび在学期間を考慮の上、各人の必要に応じ種々の教育、教授の機会
を与えるように、学校の数と種類と設備を整備することを命じてい
る。この教育法では中等学校（グラマー・スクール、テクニカル・ス
クール、モダーン・スクールの三種）に全生徒を取容して学習させ、
五年級（一六才）までが義務教育期間となっている。文部省としては
教員養成は最大の急務である。ゴールドスミス・カレッジのこの学部
は、学生の定員も五七〇名以上となり、国内で最大の養成機関となっ
た。ここから巣立つ卒業生は年々凡そ三五〇名である。

工学教室の開設

夜間学部の中に設けてある工学教室は技術担当教師の再教育のため
のものである。

b 美術工学部

一九三八年二〇〇名（内四〇名は全日制の学生）いた学生は一九四

七年四〇〇名、このうち半分は全日制の学生である。この中には多数
の退役軍人がいた。学生の活動も拡大され、人形芝居が復活し、運動
場に野外製作所が設けられた。この学部には次の課程が付設されてい
る。

外国人学生の一年課程

一九四八年海外九ヶ国から一五名の留學生がきていた。帰国後は教
師となる希望者である。

工芸の一年課程

一九四九年工芸教師の免許状を与える職業訓練課程が再び設けられ
た。

c 成人教育の夜間学部

学習教室

この学部の内容は多岐にわたっている。この学部には属する学生は一
九四六—七年には一、九〇〇名であったが、一九五〇—一年になると
三、〇〇〇名以上となり、これを一八〇の学級に編成していた。その
学級の事業は言語に関する教室五〇（古典語、現代外国語にいたる九
ヶ国語にわたっている）が最も多く、次に音楽教室は三七となってい
る。技術担当教師の工学教室があることは前に述べた。

学生の団体

この学部の学生で組織されている団体の数は一九五〇年二四協会、
会員数は凡そ一、〇〇〇名で、「かなとこ（鉄床）」という会報を発
行している。

映画愛好会

土曜日夜の定例会の出席者は平均二〇〇名で、この出席者は三学部

にまたがつている。

演奏会

公開演奏会は大集会場を使用している。

d 公開講座

週末一泊二日の大学公開講座は前に述べたように、本来は労働者教育のために工夫された講座である。しかしゴールドスミス・カレッジでは、希望する労働者も参加しているが、この外にこのカレッジに在学する学生も参加している。この講座は学位獲得のための教室の延長でもある。この公開講座は一九四七—八年には一四講座、一九四九—五〇年には三〇講座となっていた。

視学委員の報告

一九四八年、ロンドン市庁教育当局の視学委員がこの学部完全視察の結果を報告した。報告ではもっと高い程度の学級のため、また大学の公開講座の発展のために、初歩的な段階の学級を削ったかどうかと勧告している。カレッジの常任委員会はこの報告に満足していた。

四年課程に延長

一九四七年文部省は教員養成学部の不満足な二年課程を、学位を受ける為にも、ゴールドスミス・カレッジが既に許可を受けている四年課程とすべきことに同意を与えていた。一般に学位試験は、学位試験目的で勉強した三年生の終りに受け、教育実習訓練は第四年目に受けるのが普通である。一九四七年以降この八年間に、二〇〇名以上の学生（文科一五〇名自然科学七〇名）が四年課程で学習している。

植民地出身学生の二年課程新設

一九五三—四四年、植民地出身学生のために新しいこの課程が設けられた。二〇名程度の学生を採用し、二年間で教育の理論と実際を教える課程である。^(注36)

学部間の協力

教員養成学部の一部の学生は許可を受けて、映写、映画製作、合唱、合奏に参加している。ゴールドスミス・カレッジで教育を受け、ロンドン又はその近郊に就職している教師たちは、夜間学部の教室に出席している。教員養成学部で美術を専攻している学生が、美術工芸学部で研究をすすめている（静物画の教室とか彫金とかの教室等）。逆に工芸学部の学生が教員養成学部である種の技術を研究している。

カレッジ創立当時はこんな姿は全然見ることは出来なかった。ちがった学部の学生は、互に離れた場所に陣どって反目していた。しかし、今や全くちがっている。一つ屋根のもとで、互に交流しているほほえましい姿は、このカレッジの特色である。

また、学生の学生生活への復帰も早く、一九五〇年にはスポーツ・クラブ一九、その他のクラブ二一となり、その運営は勿論学生の支出金で賄っているが、一部の経費は学生連合から援助を受けていた。^(注37)

脚

一、ゴールドスミス同業組合

1. Dorothy Dymond: *The Forge, the History of Goldsmiths' College*, 1935, pp. 57-8 以下 Forge と略称
2. Ernest Pooley: *The Guilds of the City of London*, 1945 以下 Pooley 略称

3. 福原麟太郎：英語教育辞典（研究社），ギルド
 4. 増田四郎：ヨーロッパとは何か（岩波新書），p. 47
 5. 池田良三：イギリスの教育（9）カレッジの歴史，ジョーズベリーの聖マアリ・カレッジ
 6. Pooley：p. 9
 7. Ibid：p. 9
 8. Ibid：p. 12
 9. Encyclopedia Britannica, 11
 10. 西洋経済史講座（岩波書店），第一巻中世遠隔地貿易，pp. 297-300
 11. Britannica, 14, London
 12. Pooley：p. 14
 13. Ibid：pp. 14-6
 14. 池田良三：イギリスの学校教育（発行所ぎょうせい），pp. 48-52.
 15. 中川芳太郎：英文学風物誌，pp. 309-311
 16. Pooley：p. 17
 17. マックス・ウェバー：プロテスタントイズムの論理と資本主義の精神（岩波文庫），下巻，p. 36
 18. 同上，上巻，pp. 94-100
 19. Pooley：p. 32
 20. Ambrose Heal：The London Goldsmiths, 1200-1800, 1972, pp. 2-4
 21. Howard Staunton：The Great Schools of England, 1877, p. 529
 22. Ibid
 23. John Rodgers：Old Public Schools of England, 1938, p. 81.
 24. Ibid：p. 82
 25. Ibid：p. 68
 26. Ibid：p. 84
 27. Ibid：p. 71
- 三、マールボスミス・カレッジ
1. Forge：p. 2

2. 池田良三：イギリスの学校教育，全寮制学校の興隆，pp. 159-165
3. T. W. Bamford：The Rise of the Public Schools, 1967, p. 27
4. Staunton：p. 542
5. Bamford：p. 331
6. Thomas Kelly：A History of Adult Education in Great Britain, 1970, p. 103
7. フラザイ：蠅蠅の科学（岩波文庫），p. 131
8. Forge：p. 3
9. Ibid：pp. 2-4
10. Ibid：p. 5
11. Ibid：p. 5
12. F. J. C. Hearnshaw：The Centenary History of King's College London 1828-1928, 1929, p. 25 と以下 King's Co. と略称
13. Britannica, 10
14. Ibid：3
15. King's Co., p. 27
16. Ibid：p. 28
17. Ibid：p. 32
18. Ibid：pp. 37-8
19. Ibid：pp. 252-6
20. Britannica, 14
21. Forge：pp. 5-6
22. Ibid：p. 7
23. Ibid：pp. 7-9
24. S. J. Curtis：History of Education in Great Britain, 1963, p. 208.
25. Forge：p. 16
26. Curtis：p. 402
27. Forge：pp. 11-18
28. Kelly：pp. 244-6

29. Ibid : pp. 251-2
30. Ibid : pp. 243-5
31. Forge : p. 18
32. Ibid : pp. 18-9
33. Ibid : pp. 19-38
34. Ibid : pp. 38-43
35. Ibid : pp. 53-58
36. Ibid : pp. 58-60
37. Ibid : p. 60
38. F. Hearnshaw : The Centenary History of King's College London 1828-1928, 1929, pp. 395-6

あとがき

私がイギリスの教育に関心をもちはじめたのは、平塚益徳先生（現在の国立教育研究所長）のイギリスの教育についての報告をお聞きしてからである。昭和三年のことである。先生は、イギリスの学校は小規模主義をとっている、小学校から大学に至るまで生徒数は最高四〇〇名までとし、それ以上になると必ず分けている、と。小規模主義がその社会の常識となる迄には永い歴史があったと思われる。私はこの歴史を調べてみようと考えた。この頃からイギリスの古い学校の「沿革史」を中心に集めた。

これらの歴史を読みながら、イギリスの教育の実態は想像をこえるきびしいものであることを発見した。ヨーロッパのきびしい社会環境の中で、如何にして生き残ることができるか。民族の興隆を如何にしてはかることができるか。気づいたことを書きとめて、「イギリスの教育」

(1)を発表したのは、昭和四二年七月であった（これは「イギリス教育の伝統と未来、第二章となった」。その後発表した著書、論文は後記の通りである。

本論文で取扱ったゴールドスミス組合は、ロンドンの一二の大同業組合の一員である。その豊かな財力で教育事業、慈善事業に協力してきた。一九世紀後半自然科学時代を迎えるに当り、この組合はどう対処したか。その解答がこの「ゴールドスミス・カレッジ」の創立であった。当時ロンドンの北部地区の住民は、ロンドン大学のキングズ・カレッジ（一八二八年創立）の恩恵を受けていた。一八八四年総学生数一五七六名、このうち夜間学部学生は五〇九名、この外に婦人学部が独立し、五〇〇名在学していた^(註38)。ゴールドスミス・カレッジは主としてテムズ河南岸地区住民のための施設であった。教員養成学部、美術工芸学部の外に、夜間部には一八〇の教室があつて、老若男女に学問の場と、レクリエーションの場を提供している。昼間の学生が午後の課業を終って全員大から引上げる、学内がひっそりとなる。暫くすると夜間の学生が登校して賑かになる。大学の校舎も教師も昼夜の別なく市民に奉仕している。ここでは学校教育、社会教育などという区別はなく、一大教育の場となっている。権威は外から与えられるのではなく、自ら創造すべきであることを実証している。

イギリスの教育

発 表 誌

第1集	パブリック・スクール	イギリス教育の伝統と未来	第二章	昭和四二年七月
第2集	エドワード・スクリング	宮崎女子短大研究紀要	第2号	全 四三 四
第3集	無月謝学校の歴史	イギリス教育の伝統と未来	第1章	全 四四 八
第4集	イトトン・カレッジ	イギリス教育の伝統と未来	第4章	全 四五 一〇
第5集	組合立学校の歴史	未 刊		
第6集	ハロー・スクールの教育法	宮崎女子短大研究紀要	第3号	全 四七 二
第7集	勅許状の研究	イギリスの学校教育	第1章	
	ハロー・スクールの教育	宮崎女子短大研究紀要	第4号	全 四八 二
第8集	チャルズ・ヴォーソンの改革	イギリスの学校教育	第2章	全 四九 二
第9集	教育課程の研究	全	第3章	
	カレッジの歴史	宮崎女子短大研究紀要	第5号	全 五〇 三
	シュローズベリーの聖メアリ・カレッジ			
第10集	カレッジの歴史 (2)	宮崎女子短大研究紀要	第6号	全 五一 三
	ゴールドスミス・カレッジ			

著 書

発 行 所

1	イギリス教育の伝統と未来	株式会社 ぎょうせい	価 二、〇〇〇円
	トーマス・アーノルドの教育観と経営実践	(旧名帝国地方行政学会)	
2	イギリスの学校教育	全 ぎょうせい	価 一、二〇〇円
	チャールズ・ヴォーソンの改革		

昭和五一年三月三十一日

宮崎女子短期大学助教授
住所 〒880 宮崎市大和町一二九―二
電話 〇九八五―24―一八二六